東海大学　文部科学省 地(知)の拠点

Tokai university Community linking laboratory

To-Collabo Presentation

2016年度 東海大学 To-Collaboプログラム 報告会

2016年
11月5日[土]
13:00-17:15
開場 12:30

主催　東海大学　　後援　札幌市

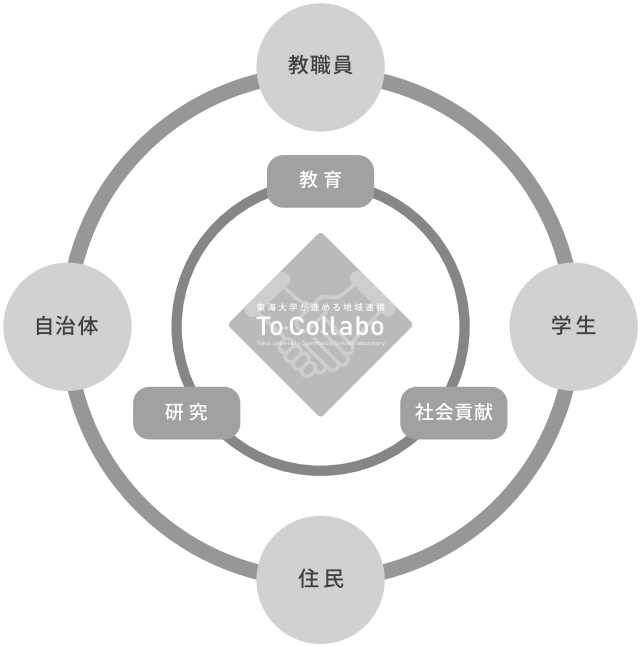
会場　東海大学付属札幌高等学校　1階講堂
〒005-8602 北海道札幌市南区南沢5条1-1-1

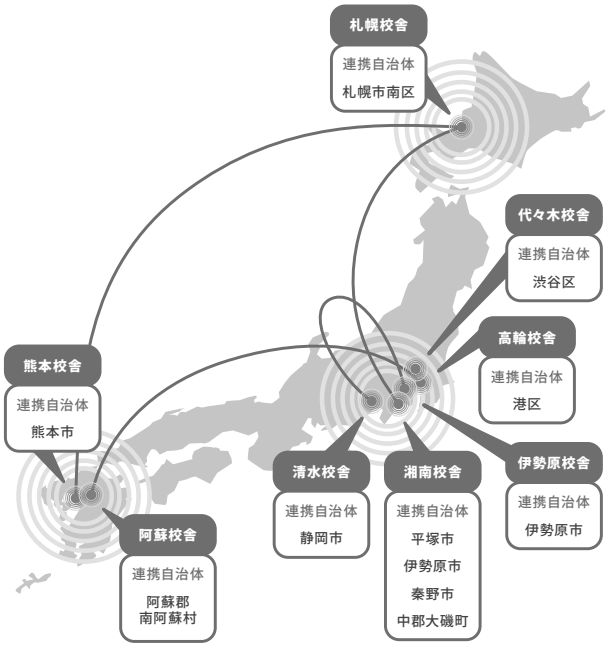
To-Collaboプログラムによる全国連動型地域連携の提案

To-Collaboプログラムとは

「To-Collabo（トコラボ）プログラム」とは、Tokai university Community Linking Laboratory の略称で、日本全国に広がる総合教育機関の高等教育拠点である東海大学（Tokai university）の特色を生かした教育研究活動と地域をつなぐ（Community Linking Laboratory）プログラムを示しています。文部科学省の平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」に基づき、キャンパス周辺の地域の問題や課題を各校舎の教職員、学生、市民、自治体が共有しながら協力して解決策を探る取組みとしてスタートしました。

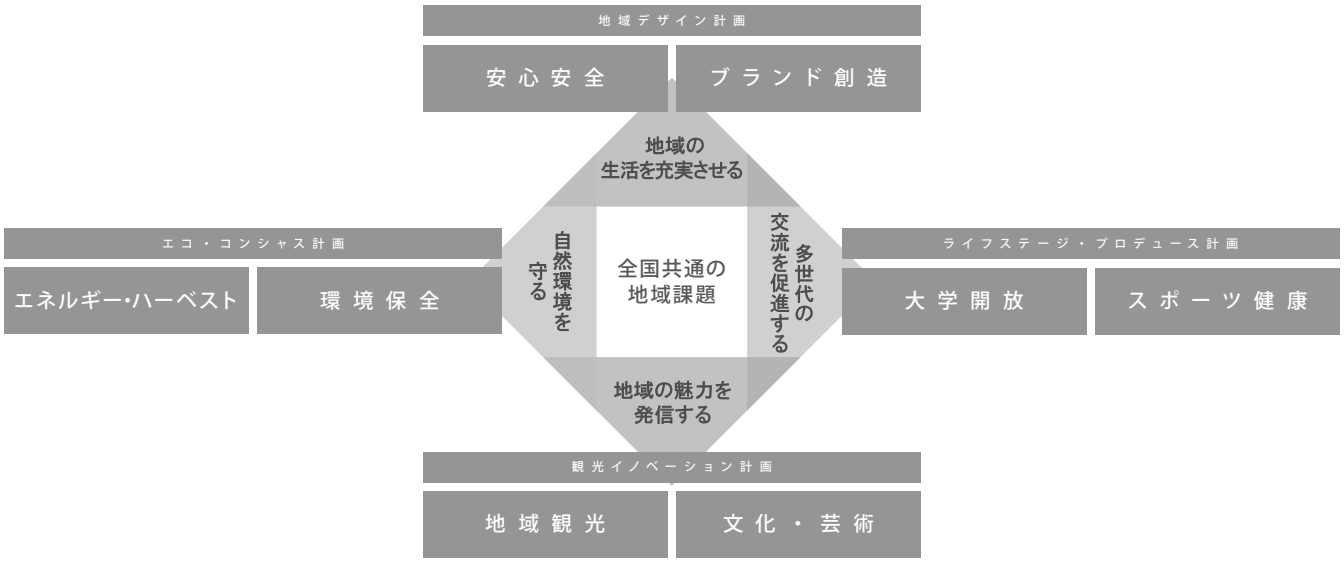
湘南・代々木・高輪・清水・伊勢原・熊本・阿蘇・札幌と全国に 8 キャンパスをもつ東海大学では、この To-Collabo の基本方針に則り、キャンパス周辺の自治体とともに地域連携活動を推進しています。





東海大学と地域を結ぶ 8 つの事業

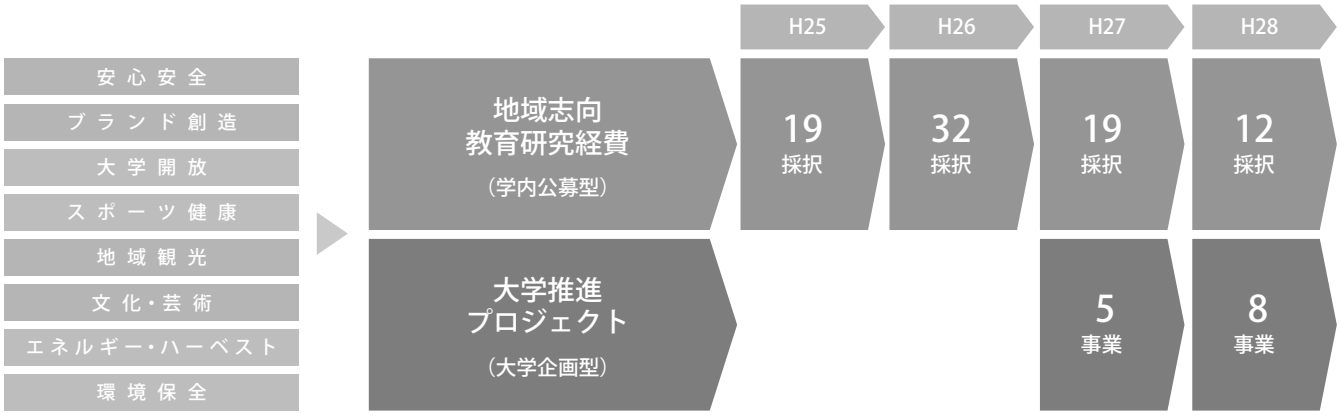
また、To-Collabo プログラムでは、全国共通の課題と東海大学の資源を考え、「安心安全」「ブランド創造」「大学開放」「スポーツ健康」「地域観光」「文化・芸術」「エネルギー・ハーベスト」「環境保全」の 4 つの計画、8 つの事業を軸に地域連携活動を展開しています。



To-Collaboプログラムによる全国連動型地域連携の提案

「地域志向教育研究経費採択課題」と「大学推進プロジェクト」の両輪で推進

平成 25 年度よりこれまでの 4 年間、東海大学の地域連携テーマである 4 計画 8 事業に則り「地域志向教育研究経費」による教員主体の学内公募型の取組みと「大学推進プロジェクト」という大学が主体的に企画する取組み個々の取組みの両輪で具体的な活動を推進しています。

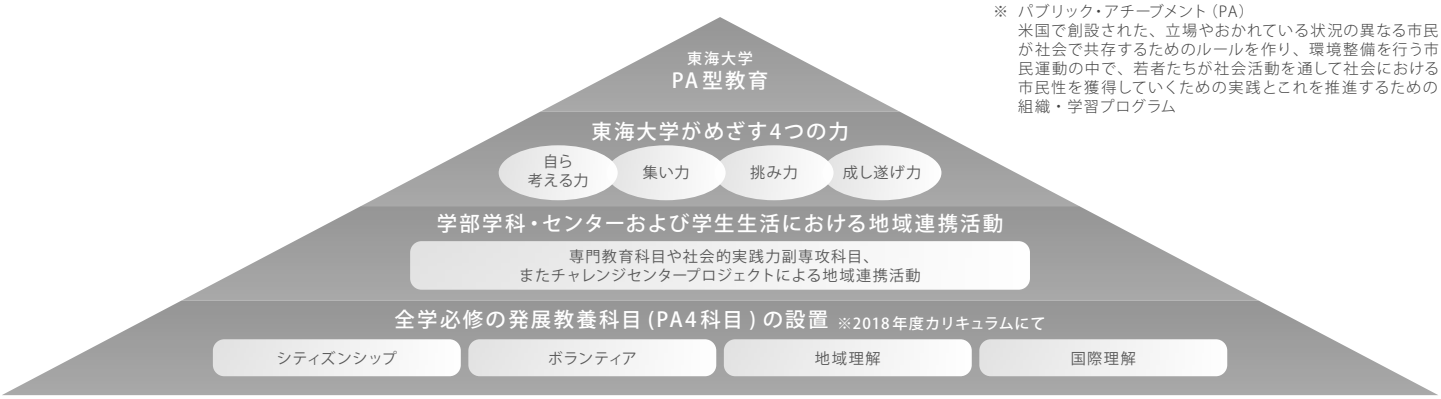


今後の展開

「To-Collabo」がめざすのは地域連携を通じた社会貢献とともに学生のシティズンシップ（市民性）を高める教育の導入であり、平成 30 年度から施行するカリキュラムにおける全学的なパブリック・アチーブメント型（PA 型）※教育の展開に向け前進します。

そして実践的な PA 型教育を進めていくためには文部科学省の補助期間が終了する平成 30 年度以降も東海大学は「To-Collabo」で推進してきた取組みを活かしこれまで築いてきた各校舎周辺の市民・自治体との関係をさらに深めながら教職員・学生が一体となりながら地域連携活動を継続させ社会に貢献していきます。

※ パブリック・アチーブメント（PA）
米国で創設された、立場やおかれている状況の異なる市民が社会で共存するためのルールを作り、環境整備を行う市民運動の中で、若者たちが社会活動を通して社会における市民性を獲得していくための実践とこれを推進するための組織・学習プログラム



2016年度東海大学To-Collaboプログラム報告会

第1部 P.4～

総合司会
道下 祥伍　生物学部生物学科２年次生

13:00- 開会挨拶　**梶井 龍太郎**　東海大学副学長

13:05- To-Collabo プログラム概要紹介
池村 明生　東海大学To-Collabo推進室長

13:15- 基調対談「地域の再発見と活性化」
秋元 克広　札幌市長
山田 清志　東海大学学長
コーディネーター　**福津 京子**　札幌人図鑑主宰

14:00- パネルディスカッション
「地域との対話・連携から価値を創造する」
パネリスト　**高野 馨**　札幌市南区長
中尾 紀行　国際文化学部デザイン文化学科教授
植田 俊　国際文化学部地域創造学科特任助教
工藤 優樹　付属札幌高等学校研究主任
佐野 加奈子　札幌ボランティアプロジェクトリーダー 生物学部生物学科３年次生
山本 直季　学生運営 Three Café 学生 国際文化学部国際コミュニケーション学科３年次生
コーディネーター　**平木 隆之**　国際文化学部長

14:55- 休憩

第2部 P.6～

15:05- 大学推進プロジェクト（4計画8事業）発表　会場：1階 講堂
安心安全事業
ブランド創造事業
大学開放事業
スポーツ健康事業
地域観光事業
文化・芸術事業
エネルギー・ハーベスト事業
環境保全事業

16:45- 閉会挨拶　**内田 晴久**　東海大学大学運営本部長

第3部 P.24～

16:50- ポスターセッション　会場：1階 エントランスホール
※ 取組内容および発表者については裏面の情報をご確認ください。

17:15- 閉会
※ ポスターセッション終了後 17:15 より 1 階カフェテリアにて情報交換会がございます。

会場案内図

第1部

基調対談
「地域の再発見と活性化」

【基調対談】

秋元 克広　札幌市長

1956年　北海道夕張市生まれ
1979年　北海道大学法学部卒業
　　札幌市役所入庁
2004年　企画調整局情報化推進部長
2005年　市民まちづくり局企画部長
2008年　南区長
2009年　市長政策室長
2012年　副市長
2015年　札幌市長

山田 清志　東海大学学長

1955年　北海道三笠市生まれ
1980年　早稲田大学法学部卒業
1984年　東海大学入職
1998年　HTIC 学長
2009年　東海大学副学長
2014年　学校法人東海大学常務理事
同年　　東海大学学長
教養学部人間環境学科社会環境課程教授
専門は経済法、消費者法。

【コーディネーター】

福津 京子　札幌人図鑑主宰

1964年　北海道札幌市生まれ
専業主婦10年、コミュニティーFMパーソナリティー15年を経て2012年独立「札幌人図鑑」を立ち上げ札幌人1000人をインタビュー。2015年J:COM札幌にて番組化。現在も更新中。

第1部

パネルディスカッション
「地域との対話・連携から価値を創造する」

パネリスト	高野　馨	札幌市南区長
	中尾 紀行	国際文化学部デザイン文化学科教授
	植田　俊	国際文化学部地域創造学科特任助教
	工藤 優樹	付属札幌高等学校研究主任
	佐野 加奈子	札幌ボランティアプロジェクトリーダー 生物学部生物学科3年次生
	山本 直季	学生運営 Three Café 学生 国際文化学部国際コミュニケーション学科3年次生
コーディネーター	平木 隆之	国際文化学部長

第2部

大学推進プロジェクト (4 計画 8 事業) 発表

【 前　半 】

地域デザイン計画　ブランド創造事業
発表者：富田 誠 （教養学部芸術学科 講師）

観光イノベーション計画　文化・芸術事業
発表者：篠原 聰 （課程資格教育センター 准教授）

ライフステージ・プロデュース計画　スポーツ健康事業
発表者：沓澤 智子 （健康科学部看護学科 教授）

エコ・コンシャス計画　環境保全事業
発表者：藤野 裕弘 （教養学部人間環境学科 教授）

質 疑 応 答

【 後　半 】

地域デザイン計画　安心安全事業
発表者：内田 理 （情報理工学部情報科学科 教授）

観光イノベーション計画　地域観光事業
発表者：植田 俊 （国際文化学部地域創造学科 特任助授）

ライフステージ・プロデュース計画　大学開放事業
発表者：池村 明生 （教養学部芸術学科 教授）

エコ・コンシャス計画　エネルギー・ハーベスト事業
発表者：高橋 俊 （工学部動力機械工学科 准教授）

質 疑 応 答

【 進　行 】 堀本 麻由子 （現代教養センター 准教授）

ブランド創造プロジェクト

教養学部芸術学科 富田 誠
国際文化学部 植田 俊
教養学部芸術学科 池村 明生
海洋学部 海洋フロンティア教育センター 岡田 夕佳

取組概要

本取組は、各キャンパスのある地域ごとの地域資源を、価値ある商品やサービスへ転換し地域のブランドを創造するプロジェクトである。

実施にいたっては、産官学それぞれの枠を超えて価値を共創する手法を検討し、札幌、湘南、清水キャンパスごとの商品・サービス化を実践するものである。

熊本キャンパスにおいては2016年4月の被災の関係から現段階では実施を見送り

札幌校舎

札幌軟石Project

ねらい

かつて耐火性と加工性の良さから道内で広く建材として利用されてきた札幌軟石であるが、他の建材の開発、建築基準法の改定等で建材としての価値を失った。

しかし、その両特性に再着目し、新たなデザインの息吹（＝価値）を吹き込むことで、古くて新しい素材に地域を代表する「力」を復活させようという意図があります。

植田 俊
国際文化学部

札幌校舎

これまで

国際文化学部デザイン文化学科の中尾紀行教授の指導のもと、演習授業にて学生が軟石を活用した作品・商品づくりを実施。地元石材加工業者および作家と連携し、石の切り出し、加工、展示・販売の現場を見学・取材しながら学生各人イメージを固めていった。

これから

今後は、札幌市内にて展示会・発表会を行い、広く軟石の文化（＝活用のあゆみ）を発信することを行っていく計画である。

植田 俊
国際文化学部

湘南校舎

ベジタマ モナカ Project

池村 明生
教養学部
芸術学科

ねらい

平塚市農産物の地産地消を普及するために誕生したキャラクター“ベジ太” と、平塚市の漁業をアピールするために誕生したキャラクター“ひらつかタマ三郎”の図案をレリーフとする“もなか種”（もなかの皮）の開発を通じて地域の食材を利用した様々な“もなか”を、東海大生および市内の企業団体関係者とともに地域ブランドとなる食品開発をめざすプロジェクトである。

湘南校舎

池村 明生
教養学部
芸術学科

これまで

2016年度は本プロジェクトの基盤をつくる取組みと捉え、東海大学教養学部の学生と平塚市農水産課との共同体制により実施する。①もなか種の開発 に関しては、学生によるデザイン設計、原型制作、金型発注が完了。

②サンプル食品の試作に関しては、学生と平塚市農水産課の職員が協力しアイディアを検討中。③展示会を通じたプロモーション活動に関しては、展示方法について平塚市農水産課と検討を開始した。

清水校舎

駿河湾産 サクラエビ Project

岡田 夕佳
海洋学部
海洋フロンティア
教育センター

ねらい

静岡県のサクラエビ漁は、近年は不漁が続き、価格が急騰している。そのため、県内の漁業者および加工業者は苦境に立たされている。さらに、海外産の低価格のサクラエビや、他の品種が、強力な競合相手となっている。

本プロジェクトでは、地域経済活性化につながるサクラエビのブランド創出をおこなう。具体的には、駿河湾産のサクラエビに関する評価、差別化などのブランディングや、食品以外の新商品の開発などをおこなう。

清水校舎

駿河湾産 サクラエビ Project

岡田 夕佳
海洋学部
海洋フロンティア
教育センター

これまでとこれから

①サクラエビの生態・漁業・流通などについて静岡県水産技術試験場にヒアリング

②サクラエビおよび類似する干しエビの官能評価（12月のサイエンスイベントで公開）

③サクラエビと他のエビを区別するマークを学生主導で制作（12月のサイエンスイベントで公開）

④廃棄されるサクラエビを活用した透明標本を学生主導で制作（商品化を想定）

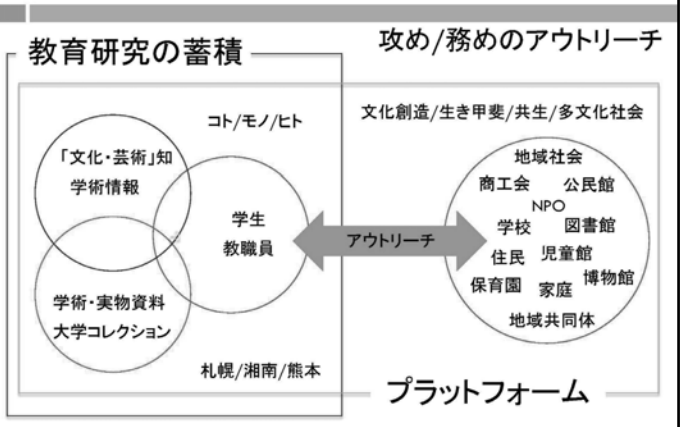
1

文化・芸術事業
（観光イノベーション計画）

大学推進プロジェクト　篠原聰・磯部二郎・伊藤明彦・阿部正喜・池村明生

2

社会基盤としての「文化・芸術」



3

札幌キャンパス

①Sapporo Design Weekへのブース参加
2016年10月19日（日）～10月23日（日）
チカホ（札幌市地下歩行空間内展示）

②サハ共和国の自然と音楽
～ホムス（口琴）の調べ～
2016年11月7日(月）18：30～20：30
クリエイティブスペースMEET.（札幌）

4

湘南キャンパス

③TOKAI芸術シニアアカデミー　3講座各4回
2016年10月8日、15日、22日、29日の各土曜日　13:30～16:30
・音楽講座：「音楽の理解」～音楽の不思議に迫る4つの講座
・美術講座：色彩のポリフォニー～『テンペラ画』を描こう
・デザイン講座：折り紙プログラムで創るランプシェード

④彫刻を触る☆体験ワークショップ
2016年8月11日（木・祝）10:00～15:00　湘南キャンパス内

⑤家族で楽しむアート　真冬の昆虫採集
2016年12月3日（土）11:00～13：00　松前記念館

⑥公開シンポジウム
「彫刻とエロス　目と手で育むユニバーサル・ミュージアムの未来」
2016年12月3日（土）15:00～18：20　11号館206教室

5

熊本キャンパス

⑦長野克也コレクション「世界のたね」展

2016年9月9日（金）～9月19日（月） 島田美術館

6

⑦「世界のたね」展 会場風景

7

⑤家族で楽しむアート 真冬の昆虫採集 ブロンズ昆虫 制作：山岸鋳金工房（伊藤一洋）

8

多様なニーズに対するアウトリーチ

「連携」は目的ではなく手段／独立性が大前提

千手観音方式からの脱却

生きがい・共生・多文化社会の実現

文部科学省 地(知)の拠点

ライフステージプロデュース計画
スポーツ健康事業

健康意識の高い市民に対する健康づくりの支援と
健康に関心の低い市民に対する健康意識の啓発

伊勢原校舎の取り組み

＊健康に対する意識の高い市民へ

「東海大学市民健康スポーツ大学」を中心とした市民の健康づくりの支援活動
（市民会員の身体活動量と心身の健康度の関連性の分析及び学生と市民との世代間交流活動）

＊健康に関心の低い市民へ

「市民に対する健康意識の啓発」プロジェクト　―「健康バス」

札幌校舎の取り組み

・「南の沢」「藻岩」（キャンパス最寄りの地域）の両地区住民を対象とした健康教室

1

「東海大学市民健康スポーツ大学」を中心とした市民の健康づくりの支援活動

■「東海大学市民健康スポーツ大学」の開催

年24回の健康講座とスポーツ指導を開催。

その中で6月と3月に体力測定を行う。

医学的検査、体力測定項目、日々の万歩計データおよびメンタルヘルスに関する質問票調査（GHQ60, POMSなど）、栄養調査項目などのデータベース構築

2016年度は、メンタルヘルスとの関連を検討

■伊勢原祭における市民健康度チェックの開催

「東海大学市民健康スポーツ大学」でおこなっている体力測定を、一般市民にも体験してもらう。

■学生と市民との世代間交流活動

これらの取り組みに学生の参加を継続すること

高齢市民とのグループワーク

現役の学生と人生の先輩とが共に就活や生き方について語る機会を企画して交流を図る

（健康科学部社会福祉学科「地域貢献科目群」の授業の一環として）

2

2013年および2014年の新規参加者の1年目と2年目を比較
女性では、2年目に、体重、BMIが低下し、骨密度、1日平均歩数が増加
GHQ60によるメンタルヘルス調査で、初年度6名の「うつ傾向」を示した人が、2年目は0となった。

GHQ60によるメンタルヘルス調査結果

	調査	例数	問題なし: 0～1点	（%）	注意を要する: ≥2点以上	（%）	有意差
GHQ60-A　（身体的症状）	1年目	53	34	64.2	19	35.8	N.S.
	2年目	55	40	72.7	15	27.3	
GHQ60-B　（不安と不眠）	1年目	53	39	73.6	14	26.4	N.S.
	2年目	55	48	87.3	7	12.7	
GHQ60-C　（社会的活動障害）	1年目	53	44	83.0	9	17.0	N.S.
	2年目	55	48	87.3	7	12.7	
GHQ60-D　（うつ傾向）	1年目	53	47	88.7	6	11.3	*
	2年目	55	55	100.0	0	－	

*:　p<0.05　（1年目と2年目の比較）

市民会員は60歳以上がほとんどで、スポーツ習慣と健康的な生活習慣を身に着けることにより、健康寿命を延ばすことにつながる可能性が高い。

3

学生と市民との世代間交流活動

・社会福祉学科　選択科目「地域保健福祉活動論」（春セメ）
　・市民と学生のワークショップ
　　・春セメ　1回
　　・履修学生数　60名、高齢地域住民　10名

・市民会員

学生への励ましの言葉
　・「アドバイスしてくれる人がいるのは本当に幸せなことですが、最後に決めるのは自分自身です」
　・「やりたいと思ったことに挑戦し、それを続けることが大切。できない理由を探してはいけません」

学生とコミュニケーションをとることが楽しみ。活動を継続していく魅力の一つになる。

・学生

感想
　・「家族や友人の大切さ、健康のありがたさ、社会に出ることの責任や厳しさなど、一つひとつの話が身にしみました。辛いときや苦しいときには今日いただいたメッセージを思い出して乗り切りたい」
　・「普段接する機会の少ない"人生の大先輩"の話をじっくり聞くことができてよかった。今でもさまざまなことにチャレンジしている市民会員の皆さんの姿勢に刺激を受けました」

高齢者とのコミュニケーションをとるきっかけとなる。

人生の先輩である高齢者の様々な経験を聴くことにより、自身の人生を考えるきっかけにもなる。

4

「市民に対する健康意識の啓発」プロジェクト —「健康バス」について—

「健康バス」2年目の考え方

【プロジェクトの目標】

- 本プロジェクトは、神奈川県と東海大学との包括連携協定として取り組む事業分野【「未病を治す神奈川宣言」未病センターの設置】の一環として伊勢原市保健福祉部健康管理課と協働事業して取り組む。
- 伊勢原市の国民健康保険者の健康診査の平成25年度の受診率は、35%～40%で、平成20～25年度でもほとんど改善はなく、昨今の医療費増大の折、憂いる状況にある。したがって、健康診査の受診率の改善を図ることは、非常に重要な課題となっている。
- 未受診者60%～65%の受診に対する意識は、「全く受診する気のない人」と「受診する気はあるものの何となく受診できていない人」と半々の状況。そこで、本プロジェクトでは、この「受診できていない人」を中心に働きかけ、市民に対する健康意識の啓発教育を行う。

初年度

- 「健康バス」の登場
  - ・初めてのインパクト
  - ・多彩な測定メニュー
- まず、実績を作る。集客を狙ってイベント時に開催

今年度　定着化を目指した！

- 「健康バス」の市民へのアピール
  - ・自治会単位で開催
  - ・開催地区で「健康バス」を巡回運行してアピール
- 測定結果データを評価できるように、測定メニューの統一

5

「健康バス」参加者からの声

- 身近なところで。回数をもっと。市内全域に。定期的に。学生に感謝。継続して。→更なる展開を
- 保健師や看護師の話が聞けた。詳しく説明が聞けた。時間のない主婦、有り難い。→健康意識の向上
- 忙しくて。面倒と。苦手で。病気をしていないから。節目の。等、これまで健診を受けていなかったがこれからは健診を受けよう。→健康診査受診の動機付け

- 身近なところで健康の測定を受けることができることは非常に有り難い。今後は回数をもっと増やしてほしい。（片町第二自治会長）
- 通常の健診にはない測定項目が受けることができることは有り難い。来年度は回数を増やすなど市内全域に広めてほしい。参加者は皆、喜んでいた。（池端自治会長）
- こうした取り組みは定期的に実行してもらいたい。
- 大学の先生や学生に感謝したい。日程調整等大変だと思うが是非、継続してほしい。
- 待ち時間も少なく保健師や看護師の話を聞けたことは有意義だった。
- 1度に色々な測定ができ、詳しく説明が聞けたので来て良かった。（50代女性）
- 仕事をしていた時は健診を受けていたが、結婚し仕事を辞めてから健診を受けていなかったので、参加した。時間のない主婦には、このような取り組みは大変有り難いと思っている。（30歳女性）
- これまで忙しくて健診を受けていなかったが、10月に会社の健診を受けようと思った。（52歳女性）
- これまで面倒と思い健診を受けていなかったが、自分自身の健康状態が理解できた。（78歳男性）
- 病院が苦手で健診を受けていなかったが、健診やがん検診を受けようと思った。（75歳女性）
- 病気をしていないから健診に行ったことがないが、今後は健診を受けようと思う。（70歳女性）
- これまで健診を受けていなかったが、節目の年齢であり気になっていた。今年は健診を受けたいと思う。（65歳女性）

6

自治会館から見える「健康バス」

【想定される成果】

- 本プロジェクトは、「市民に対する健康意識啓発」教育を通して、市民の健康意識の向上を図ることにより、直接的には、健康診査の受診率のアップが取り組み成果として期待することができる。この健康診査の受診は、疾患発症に対する予防対策となる。また、健康意識の向上は、日々の生活習慣の改善にもつながり、結果として市民の健康寿命の延伸につながる。
- これらの取り組み成果は、伊勢原市をはじめ、秦野市、平塚市、厚木市、大和市、大磯町へと広く神奈川県西地域への展開が期待できる。
- To-Collaboと連携することで、さまざまな学部の学生が地域健康教育への関心を高めることができる。東海大学にとっても、ここで得られる健康データの解析研究のみならず、広域の地域貢献につながり、東海大学のブランド価値を大きく高めるものとなり、引いては東海大学への入学の増加などにつながって行く。

「健康バス測定会」の様子

7

「南の沢」「藻岩」（札幌キャンパス最寄りの地域）の両地区住民を対象とした健康教室

- 札幌市南区の「健康面」の地域課題の調査
  - ・高齢者の筋力・骨密度の低下による転倒事故・怪我の予防と体力向上
- 既に当該地域で行われている健康体操クラブ等の活動とも連携
- 認知症関する情報収集の機会の創出、ヨガ・マッサージなど低強度高効率運動の実施、紅葉を見ながらのウォーキング・登山など、地域の方々の要望・希望等もすくい上げ、活動を行った。

南沢神社会館での「健康教室」の様子

今後の方針

身体機能面の維持・向上のみならず健康生活のQOL向上をもくろんだ企画の実施。

児童・生徒を対象としたスポーツ教室企画等にも関連付け、より幅広い層に向けた健康の維持・向上への啓発を今後も行っていく。

8

大学推進事業　エココンシャス計画・環境保全事業
『環境保全型社会に向けた次世代育成の取組み』

◎湘南校舎藤野班では金目川水系をフィールドとして、昨年度まで地域志向教育研究経費で実施してきた『世代間共生にむけた環境NPOと連携による環境教育の実践と検討』の継続・発展として取り組む

◎札幌校舎、竹中班でも、テーマを昨年度まで地域志向教育研究経費で実施してきた『コムクドリの生態と渡り解明し保全を考える―地域と大学の協働活動として―』の継続、発展として取り組む。

◎清水校舎、千賀班では、『水生生物を考える学生サークルの地域連携』をテーマとして実施する。

今年度実施した内容（主なものを抜粋）

- **親子の川の勉強会**
  夏2回（二日間の日程の計四日間）の実施
- **比々多小学校主催の里川ウォーキング企画**
  実施内容企画及び当日のコーディネーターを担当
- **大住中学校での総合的な活動（地域学習）**
  年間通じた授業サポート（延べ40回程度）
- **付属静岡翔洋小学校科学クラブを起点とした清水地域での展開**
  - 付属静岡翔洋小学校…タツノオトシゴ及び水生昆虫の観察
  - 清水三保第二小学校…五年生　海岸浸食
    六年生　身近な生物　各1回実施
- **他地域での取り組みの視察**
  高崎経済大学が主催する生物観察会への参加

今年度の取り組み

今年度の成果

- 共同取組者の増加により非常に活発な活動が可能になった
  →特に他地域への発展として、清水地域での取り組みを行ってきたが、昨年度までの付属小学校のみならず、清水三保第二小学校においても実施ができ、また単発的ではなく、通年の長期的な取り組みができている
- 他地域（高崎経済大学飯島ゼミ）の視察により、今年度の取り組みのヒント（水生昆虫カード）を得ることができ、また、今後双方の取り組みおいて連携していけるよう意見・情報交換を行った
- 昨年度までも多くの学生が参画していたが、特定の学生が関連することが多く、偏りがあったが、今年度は複数の学生がそれぞれの卒業研究・修士論文研究を地域において施行する機会を得ることができている

今後の予定

- **比々多小学校での生物観察会**

  11月13日・20日に大山及び小学校付近にて実施予定（大山小学校も参加予定）

- **付属静岡翔洋小学校科学クラブを起点とした清水地域での展開**
  - 付属静岡翔洋小学校…11月・年末年始・1月後半にそれぞれ一回
  - 清水三保第二小学校…五年生　海岸浸食を題材とした授業を11月・2月を予定
    六年生　身近な生物を題材とした授業を11月・2月を予定

- **シンポジウム『環境保全型社会に向けた次世代育成の取組み』の開催**

  2017年1月22日（日）東海大学湘南校舎にて、基調講演に医学部長である医学部生体構造機能学坂部先生及び同教室寺山講師を招聘し、開催を予定

- **湘南里川づくりフォーラムの開催**

  2017年2月5日（日）東海大学湘南校舎にて、金目川水系で様々な活動に取り組む団体が一堂に会して意見を取り交わすフォーラムを実施する

2　大学推進プロジェクト　安心安全【地域デザイン】　To-Collabo

取組の概要

地震や台風、ゲリラ豪雨等の大規模な自然災害が避けられない我が国では、発災前、発災時、発災後の時系列を考慮した対応策を平時から入念に準備することが必須である。

「To-Collabo安心安全プロジェクト」の目的は、多種多様な災害への対応策を自治体や地域住民と連携して確立することである。そのため、ワークショップやフォーラムなどの各種イベントを連携自治体や地元住民と協働で実施する。

3　大学推進プロジェクト　安心安全【地域デザイン】　To-Collabo

今年度の取組（地域連携 1）

6月25日
市民による
意見交換会

- 大地震発生を想定したワークショップを実施
- 参加者総数　約120名（内、本学学生・教職員10名）

4　大学推進プロジェクト　安心安全【地域デザイン】　To-Collabo

今年度の取組（地域連携 2）

10月1日
秦野市
第二回防災
フォーラム

- 有識者の基調講演、秦野高校の被災地研修の報告、意見交換会の報告
- 参加者総数　約200名

5　大学推進プロジェクト　安心安全【地域デザイン】　To-Collabo

今年度の取組（教育活動）

防災教育の
実践

- 防災教育支援システム（ePAD）を開発し、湘南校舎・代々木校舎で開講されている「挑み力（演習B）」にて実践

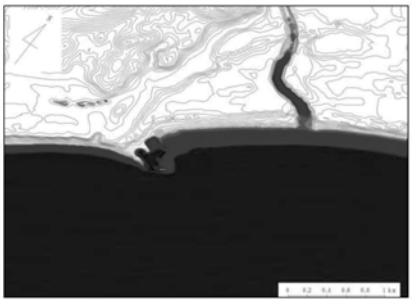
今年度の取組（研究活動 1）

災害情報システムの開発

- Twitterを用いた災害情報共有システム・災害時安否確認システムなどを開発
- 神奈川県「政策提案制度」の最優秀提案に選ばれる

今年度の取組（研究活動 2）

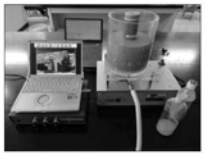
震災被害シミュレーションの開発



- 主に大磯町を対象とした津波浸水シミュレーション、および避難シミュレーションを開発

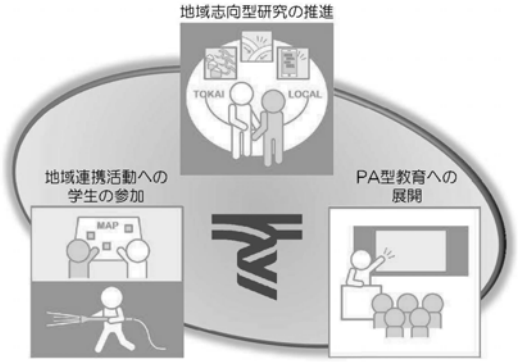
今後の活動予定（主なもの）

- 「親子で楽しむ防災広場」を12月3日に湘南校舎で開催（グローカルフェスタ内）



- 平塚市の自治会ごとの防災マップ、防災マニュアル作成に平塚市防災課と協働で取り組む
- 防災セミナー「相模川下流域の自然災害と防災対策について考える（仮題）」を開催予定

取組が目指す方向性



「地域とともに歩む大学」としてのブランド力向上

2016年度To-Collabo　東海大学推進プロジェクト
Ⅲ－1　観光イノベーション事業：地域観光事業
『インバウンド観光の推進による地域の活性化』

中間発表（2016年11月5日、於：札幌校舎）

代々木・湘南校舎、清水校舎、熊本校舎、札幌校舎
4校舎による連携研究事業

代表者：松本　亮三
校舎責任者：屋代雅充（湘南・代々木校舎）、東憲子（清水校舎）
宮内順（熊本校舎）、植田俊（札幌校舎）

【取組の概要】2015年は、訪日外客数約1974万人となり、インバウンド観光が著しく進展したが、わが国の外国人観光客受入体制は未だに不十分であり、特に地方への外国人誘客を進め、地域活性化を図ることが要請されている。本事業は、湘南・代々木、清水、熊本、札幌の各校舎で、それぞれの地域との連携を深め、各地の実情に応じた適切なインバウンド観光推進策を、事業参加校舎全体で案出することを目的としている。学生を積極的に参加させ、PA教育を実施することも目的の1つである。

1

（湘南・代々木校舎）『訪日観光客の丹沢湘南地域への誘致』
丹沢湘南地域におけるインバウンド観光推進のための情報発信

●取り組みの概要

【調査・研究目的】

東京に滞在する機会のある訪日外国人に対して、丹沢湘南地域の観光魅力を発信する方法を提案する。

【検討経過】（★は学生参画）

①東京に来ている訪日外国人向けの情報提供手段を検討した。★

②都内の各種観光案内場所で、外国人観光客向けに英語で丹沢・大山や湘南地域がどの程度紹介されているのかを、学生6名の参画により調査した。★

③東京都心部の訪日外国人向け観光案内所6箇所における丹沢・大山地域の観光プロモーションの現状を調査した。★

④東京近郊を訪れる欧米人旅行者の特徴を「訪日外国人消費動向調査（2016）」のデータを元に把握した。★

⑤丹沢湘南観光連携会議（左図）の会議メンバーの自治体および観光協会での外国人向けの観光情報の発信状況に関する現況を把握した。公共による情報発信やFree WiFiの整備はまだ不十分であり今後の課題となっていた。

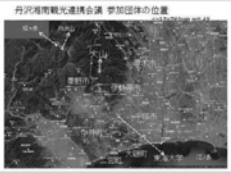
2

⑥丹沢・大山ケーブルカー周辺での外国人の来訪状況を8/11（山の日）に現地観察したが、必ずしも多数が訪れているという訳ではなかった。★

【今後の検討作業】

そこで、丹沢・大山と似た観光資源および観光施設があり、外国人観光客が多数訪れている高尾山（右図）に着目し、ここを訪れている外国人観光客の来訪動機等を調査することで、丹沢・大山への外国人誘致方策を考える手掛かりを得ることとした。★

丹沢湘南観光連携会議 参加団体の位置



丹沢・大山と高尾山との位置関係

●想定される成果

（1）東京に滞在する機会のある訪日外国人に対して、丹沢湘南地域（特に大山）の観光魅力を発信し、誘致するために必要とされる方法が明確化できる。（今年度は英語の通じる外国人を対象）

（2）丹沢湘南地域を訪れる訪日外国人に対して、魅力的かつ実用的な観光プランが何であるのかを明確化できる。

3

（清水校舎）『クルーズ客船インバウンド観光』
海の玄関口　清水港を拠点にした地域振興

●研究の目的

清水港に寄港するクルーズ客船による訪日観光客の参加するバスツアー、まちめぐり等の調査、既存調査を参考に、国交省、静岡県、静岡市と連携して、ニーズに応じたオプショナルツアー等の提案によるインバウンド観光の推進を図る。

●取組の概要

❶クルーズ客船による訪日外国人観光客を対象にした静岡特有の地域資源及び日本文化・地域生活体験等の掘り起こしによりインバウンド観光ツアーを提供する。

❷滞在時間を考慮した地域周遊・体験交流型観光マップの制作により、地域理解を促進し、その魅力を発信する。

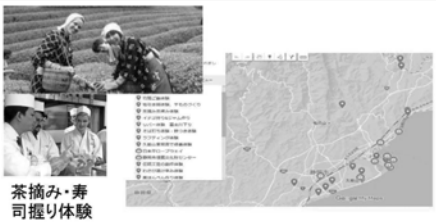
❸富士山世界遺産三保松原における観光客と住民のバランスのとれたインバウンド観光受入れ環境整備の社会実験を通じ、次年度以降の整備に結びつける。

4

●実行中の事業並びに今後の予定と期待する成果

❶調査で判明した課題を解決するために「富士山絶景 清水港周遊体験による交流型観光ツアー造成とマップ制作」を行っている。
❷新企画のツアー、マップの検証を行い、改善し、成果物を完成する。
❸ツアー、マップの実効性をクルーズ客船誘致活動、インバウンド観光客に配布、検証し次年度に向けた取組みを行う。インバウンド観光客、国内観光客向けマップを作成する。
❹三保松原の観光客受入れ環境の整備が行われる。

本プロジェクトの実施を通じ、従来各事業が点として整備、実施されてきたが、インバウンド受入れ環境としてのネットワーク体制ができたことは大きな成果である。



茶摘み・寿司握り体験

富士山絶景ポイント・静岡体験型観光ディープツアーマップ
（マップは現在作成中。図はそのプロトタイプ〔google版〕である）

5

（熊本校舎）『熊本地震後の観光による地域振興』復興DMC（DMO）の確立を目指して

熊本地震
4月14日
4月16日

①熊本観光の2本柱である熊本城、阿蘇に甚大なダメージ
②阿蘇へのアクセスに重大な影響
・国道57号線　・俵山トンネル　・阿蘇大橋
・JR豊肥本線　・南阿蘇鉄道
③南阿蘇・阿蘇・熊本市などの宿泊施設が被災

阿蘇へのアクセスは外輪山経由のミルクロード、グリーンロードのみ

観光への影響

①九州全体では、地震直後75万人泊のキャンセル
②熊本の4～6月の宿泊客数は、33万人（前年同期の80%）
国内客は8%減（九州内は前年並）、海外客は60%減（出典：熊本市）
③年間180万人の来場者があった熊本城は、天守閣、石垣の被害が大きく、有料区域の入場が困難に。
③落ち込みが激しいのは、インバウンド、教育旅行、組織型団体、パッケージツアー。

・夏の宿泊需要は前年並みに回復
・熊本城は8月は無料区域来場者が12万人（対前年同期比80%）
・ビジネス需要／FITは回復
・インバウンド／教育旅行／組織団体は依然低迷

政府の支援
・ふっこう割（夏～秋の宿泊施設支援）
・海外プロモーション（インバウンド対策）
・グループ補助金（温泉施設の復旧）

6

熊本観光の課題

①アクセスの復旧
阿蘇の観光の最大の障害がアクセス。鉄道の回復に時間がかかる一方で、ミルクロード、グリーンロードは　冬場に凍結の問題。
②外国人旅行者及び九州外の旅行者の回復
九州内の旅行者はある程度回復（ふっこう割の利用者の60%は九州内の旅行者）したが、国内外の長距離旅行は依然低迷。
③教育旅行、組織団体の取り込み
個人旅行者は回復の傾向にあるが、教育旅行、組織団体については、強力な販売促進が必要。
④ふっこう割以降の旅行者誘致策
ふっこう割が終了する2017年1月以降の旅行者誘致が課題。とくに阿蘇は冬場はオフシーズンであり、アクセスの不安が残るだけに、宿泊施設の経営の悪化が懸念。

復興DMC

①冬場のアクセス確保などインフラ整備の推進
②国内外の主要市場での販売促進（とくにインバウンド）
③BoB型の商品開発とクライアントへのセールス活動
④観光施設の経営支援を行政に働きかけ

7

（札幌校舎）『大都市近郊におけるインバウンド観光推進に向けた地域ホスピタリティー形成・向上実践』定山渓温泉におけるグローバルマップ・アイコンづくり

【背景】
北海道におけるインバウンドの増加の一方で、「札幌＝泊まる場所」「札幌市外＝訪れる場所」という位置づけが顕著に。その影響を顕著に受けた代表的地域である「[redacted]」の[redacted]が行政・地域にとっての喫緊の課題となっている。

【取組み】
観光地再編の一助となるべく、国内・国外問わず旅行者が現地で提供されるサービス、見どころ、観光ルート等が一目見て分かる「[redacted]」およびそれを盛り込んだ「[redacted]」づくり

【協力】
観光協会、旅館組合、連合町内会、まちづくりセンター、各商店ほか

【スケジュール】
現地踏査、既刊誌調査・・・9月完了
店舗、景勝地取材・・・10月完了
マップ・ピクトグラム作成・・・～[redacted]

8

1. 取組みの目的・目標

LIFE STAGE PRODUCE OPEN CAMPUS

大学という知の資源と地の環境を開放し 多世代交流につながる 「地（知）の拠点」をめざす

- 2016年度は校舎間との連携を強化
- 湘南校舎は「大学推進プロジェクト」（大学開放事業）として地域住民参加の取組みを集約
- 他校舎は「地域志向教育研究経費」事業（Bタイプ）として各学部学科の特徴を活かした取組みを推進

知を活かした地域住民と大学との距離を縮める取組みを実践

2. 取組みの概要

LIFE STAGE PRODUCE OPEN CAMPUS

大学推進PJ　／　地域志向教育研究経費（Bタイプ）

湘南 校舎	高輪 校舎	代々木 校舎	札幌 校舎	清水 校舎
地域連携デーの開催による知を活かした地域住民との多世代交流の推進	世代を超えた知の共有と育成を目指した地域連動型教育プログラムの構築	「スマイル よよぎ プロジェクト」	札幌市南区の再発見と活性化「世代を越えた活動と大学の知の貢献」	洋上キャンパス「望星丸 洋上セミナー」
池村 明生（教養学部芸術学科デザイン学課程） 磯部 二郎（教養学部教養学科日本文学課程） 岡田 工（専門教育センター） 篠原 聡（教育学部教育センター） 内田 理（理工学部情報科学科）	崔 一英（共通教養教育センター） 渡辺 唯美、福原 雅朝（情報通信学部総合システムプロデュース学科） 小林 和彦（情報通信学部総合システム工学科） 経島 敦樹（教養学部芸術学科デザイン学科） 田丸 智也、田中 紀代子（高齢者福祉センター） 福村 哲（高齢者福祉センター） 河村 和文（高齢者福祉）	遠藤 昊弘（観光学部観光学科） 岩橋 伸行（観光学部観光学科） 安達 雅一郎（教育学部） 大島 信一郎（教育学部代々木教育学部） 佐野 直哉（教育学部代々木教育学部）	竹中 践（生物学部生物学科） 他	千賀 康弘（海洋学部海洋地球科学科） 他

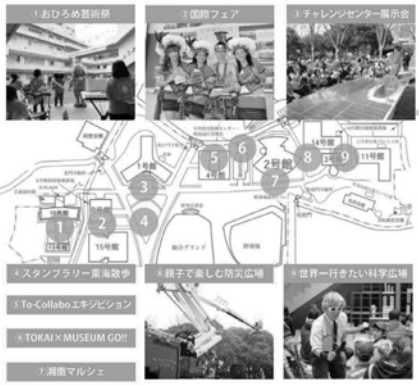
3. 湘南校舎での取組みと期待できる成果

LIFE STAGE PRODUCE OPEN CAMPUS

■名称
地域連携デーの開催による知を活かした地域住民との多世代交流の推進

■取組み
教職員・学生と一体となり、湘南校舎周辺の様々な世代の地域住民を対象する地域連携デー・イベント「TOKAIグローカルフェスタ2016」を12月3日（土）に開催。
イベントを通じて大学と地域との交流を促進し、「地（知）の拠点化」に向けた基盤づくりを実践。

■期待できる成果
1）大学に対する地域住民の親近感の醸成
2）大学発の地域連携テーマのアピール
3）学生参加によるPA型教育の施行
4）他部署協力による職員参加のSD機会
5）地（知）の拠点化の継続事業の実践



4. 高輪校舎での取組みと期待できる成果

LIFE STAGE PRODUCE OPEN CAMPUS

■名称
世代を超えた知の共有と育成を目指した地域連動型教育プログラムの構築

■取組み
これまで作成した教育コンテンツを利用して学生主導の児童向けプログラムを展開。
○実施されたプログラム
正　課：「音で遊ぼう」「英語あそび」
正課外：「ロボットと遊ぼう」「野菜の収穫」「読み聞かせ」「電子工作」
他「たかなわ子どもカレッジ」の共同運営

■期待できる成果
1）自治体、住民、各種団体との信頼関係構築
2）多世代住民の共育スペースの構築
3）学生の社会的実践力の向上
4）PA型教育の実践の場
5）地域住民に身近で、開かれた大学

5. 代々木校舎での取組みと期待できる成果

LIFE STAGE PRODUCE OPEN CAMPUS

■名称
スマイルよよぎプロジェクト

■取組み
地域を笑顔でつなぐプロジェクトとして、学生と地域（特に子ども）の交流を通し、大学開放と地域貢献の取り組みを推進。地域貢献は既存の地域関連行事への運営サポートを主に行い、大学開放では都会に住む子どもたちに大学生と交流しながら体を動かし、文化・自然と触れ合いを提供。

■期待できる成果
1）キャンパスに対する地域住民の認知度向上
2）地域における大学の機能強化（防災面）
3）学生が社会貢献を通して市民性を獲得
4）職員と学生の交流によるSDの機会
5）地域連携のための運営組織を強化

■計画中の取組み
- ④防災宿泊体験「大学に泊まう！」
- ⑤代々木キャンパス周辺の歴史を訪ねるまち歩き「よよまちウォーキング」
- ⑥代々木上原駅前商店街「ハロウィン」
- ⑦富ヶ谷二丁目「クリスマス会」

6. 札幌校舎での取組みと期待できる成果

LIFE STAGE PRODUCE OPEN CAMPUS

■名称
札幌市南区の再発見と活性化
世代を越えた活動と大学の知の貢献

■取組み
これまでに札幌校舎が行ってきた地域連携活動を活かしつつ、教育的な貢献を定着することを目的に南区の自然等の解説ブック作成や、子供からお年寄りの参加型行事を展開。また南区を題材に英語で楽しむ行事やデザインの製作を子供と保護者の参加によって実施。

■期待できる成果
1）地元地域の学校、団体との交流、連携
2）南区の社会教育施設との協力の日常化
3）学生の能動的な地域活動参加
4）教員の専門を生かした地域貢献
5）地域との連携の継続性

7. 清水校舎での取組みと期待できる成果

LIFE STAGE PRODUCE OPEN CAMPUS

■名称
洋上キャンパス「望星丸洋上セミナー」

■取組み
9/25 :一般市民を対象に「望星丸」にて駿河湾内での海洋実習体験洋上セミナーを開催。一般応募者57名を対象に、教職員、学生20名が講師・案内を担当。参加者に海洋学部の教育・研究内容を伝え、駿河湾の魅力に気づき、海の環境保全を考える。
11/3 :海洋学部図書館に洋上セミナー参加者を招待して、学生とともに駿河湾の魅力を語る。海洋祭へも参加し、海の魅力を発信する。

■期待できる成果
1）地域の財産「駿河湾」の魅力の気づき
2）大学に対する地域住民の信頼の獲得
3）学生に対する地域の期待の獲得
4）学生参加によるPA型教育の施行

参加者年齢構成

セミナー参加前後での興味や関心の変化

8. 本事業における今後の目標

LIFE STAGE PRODUCE OPEN CAMPUS

地域と国際	湘南 校舎	各校舎の特色に合わせ全校舎において地域連携デーを継続的に開催	札幌 校舎	自然とデザイン
医と健康	伊勢原 校舎		清水 校舎	海と洋上
情報と教育	高輪 校舎		熊本 校舎	産業と観光
生活と観光	代々木 校舎		阿蘇 校舎	農と暮らし

教職員と学生が一体となり「地（知）の拠点化」を浸透

TOKAI　　文部科学省 地(知)の拠点

大学推進プロジェクト

エネルギー・ハーベスト事業

福田　紘大　（工学部　航空宇宙学科 航空宇宙学専攻）
木村　英樹　（工学部　電気電子工学科）
高橋　俊　　（工学部　動力機械工学科）
長谷川　真也（工学部　動力機械工学科）
田中　博通　（海洋学部　海洋建設工学科）
清田　英夫　（基盤工学部　電気電子情報工学科）
冨田 恒之　（理学部　化学科）

背景

2011年の震災以降、再生可能エネルギーへの注目や期待が以前にも増して高まっている。

そういった背景から

新しい創エネルギー・省エネルギー技術の検討、研究・開発が盛んに行われているだけでなく、スマートシティーと呼ばれる分散型電源システムを利用した街づくりなどについても、議論が活発化している。

しかしながら、

実際に住民が再生可能エネルギーや省エネ・創エネに関することをどれだけ理解しているのかと問われれば、まだまだ浸透しているとは言い難い。

2

本プロジェクトの目的 (1/2)

一方で、東海大学においては、近年、多くの新しい再生可能エネルギー技術の研究・開発が進められている。

本学のエネルギー関係の研究成果を広く公開し、
地域住民の方々に、

- 再生可能エネルギーが、これまでどのような発展をしてきているのか、
- 現在、どのような最先端テクノロジーが存在するのか

について知って頂き、

3

本プロジェクトの目的 (2/2)

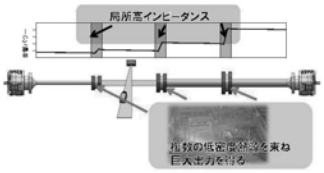
地域の方々が、エネルギーについて自分たちで考え、議論する機会を作り、将来自分たちの暮らす地域のエネルギー供給についてもどうすべきか考える一助となることを目的とする。

学生が、地域のエネルギー問題の解決策を地域住民と一緒に考える場を設けることで、本学が進めるパブリックアチーブメント型教育の一環として位置づけている。

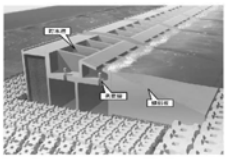
4

技術紹介:　熱音響発電システム
ソーラーカー
越波式波力発電システム

ソーラーカー



熱音響発電システム



越波式波力発電

5

イベントにおける展示・技術の紹介

OSCオリンピック湘南シティ（8/11-16）

新東名ハイウェイ・モーターショー(8/11-16)

ドリームサイエンス2016 in Shimizu (8/10)

世界一行きたい科学広場in湘南2016 Summer（8/28）

第8回伊勢自フェスタ2016 (9/11)

湘南ひらつかテクノフェア2016 (10/16)

6

エネルギー啓発教室の開催、講演、阿蘇震災支援

ソーラーカーを用いた小学生対象の理科教育（7/12開催）

神奈川県公立中学校教育研究会 技術・家庭科研究部会 第46回総会での講演（5/26）

防災セミナー『熊本地震・東北地方太平洋沖地震から学ぶ』での講演（9/4）

阿蘇キャンパス避難所への災害救援物資輸送（4/16-19）

7

まとめおよび今後の予定

- 今年度実施してきたエネルギー啓発教室の開催・技術展示などを通して、一般の市民の方々の再生可能エネルギーや新エネルギーに対する関心が高いことが確認されており、将来に向けて、自分たちの暮らす地域へのエネルギーの供給をどうすべきかについて考える有意義な機会とすることができている。
- イベント開催を通して参加学生から創エネルギー・省エネルギーに関する意見・アイデアも出されるようになってきており、学生が地域のエネルギー問題の解決策を地域住民と一緒に考えるパブリックアチーブメント型教育としての成果も出てきている。
- 今年度中には、さらに、近隣の子供たちを対象としたエネルギー啓発教室の実施を予定しており、本プロジェクトを通して、様々な世代の方々に本学のエネルギーに関する最新の研究成果を知ってもらうだけでなく、エネルギーについて自分たちで考え、議論してもらう機会を作っていきたいと考えている。

8

MEMO

第3部

ポスターセッション　課題名・代表者・発表者一覧

	課題名と代表者名	事業分類	発表者名
大学推進プロジェクト	**地域デザイン計画　安心安全事業** **内田　理**　情報理工学部情報科学科 教授	地域デザイン計画 安心安全事業	**内田　理** 情報理工学部情報科学科 教授
	地域デザイン計画　ブランド創造事業 **富田　誠**　教養学部芸術学科 講師	地域デザイン計画 ブランド創造事業	**富田　誠** 教養学部芸術学科 講師
	ライフステージ・プロデュース計画　大学開放事業 **池村 明生**　教養学部芸術学科 教授	ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業	**池村 明生** 教養学部芸術学科 教授
	ライフステージ・プロデュース計画　スポーツ健康事業 **沓澤 智子**　健康科学部看護学科 教授	ライフステージ・プロデュース計画 スポーツ健康事業	**笠口 隆重** 医学部医学科基礎医学系 特任教授
	観光イノベーション計画　地域観光事業 **松本 亮三**　観光学部観光学科 教授	観光イノベーション計画 地域観光事業	**植田　俊** 国際文化学部地域創造学科 特任助教
	観光イノベーション計画　文化・芸術事業 **篠原　聰**　課程資格教育センター 准教授	観光イノベーション計画 文化・芸術事業	**篠原　聰** 課程資格教育センター 准教授
	エコ・コンシャス計画　エネルギー・ハーベスト事業 **福田 紘大**　工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻 准教授	エコ・コンシャス計画 エネルギー・ハーベスト事業	**高橋　俊** 工学部動力機械工学科 准教授
	エコ・コンシャス計画　環境保全事業 **藤野 裕弘**　教養学部人間環境学科 教授	エコ・コンシャス計画 環境保全事業	**藤野 裕弘** 教養学部人間環境学科 教授
地域志向教育研究経費採択課題	**パブリック・アチーブメント教育における継続的実践効果の検証による地域づくりの担い手育成の取組** **小林 俊行**　清水教養教育センター 教授	観光イノベーション計画 地域観光事業	**小林 俊行** 清水教養教育センター 教授
	外国客船入港における国際観光事業への振興支援と英語教育 **加藤 和美**　清水教養教育センター 講師	観光イノベーション計画 地域観光事業	**加藤 和美** 清水教養教育センター 講師
	高校生の遺伝学的検査の理解を支援する実習形式教育プログラムの開発 **宮地 勇人**　医学部医学科基盤診療学系 教授	ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業	**宮地 勇人** 医学部医学科基盤診療学系 教授
	「学前夕暮れシアター」（定期映画上映会）の企画・運営 **水島 久光**　文学部広報メディア学科 教授	ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業	**水島 久光** 文学部広報メディア学科 教授
	生命科学実習を通じた地域連携による幼児教育と初等教育の橋渡しの試み **阿部 幸一郎**　医学部医学科基礎医学系 准教授	ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業	**阿部 幸一郎** 医学部医学科基礎医学系 准教授
	駿河湾産未利用魚「ハダカイワシ」の加工利活用による地域産業の活性化 **後藤 慶一**　海洋学部水産学科 教授	地域デザイン計画 ブランド創造事業	**齋藤　寛** 海洋学部水産学科 教授
	外国人の視点に立脚した新たな伊勢原市の観光資源創出 **田辺 加恵**　国際教育センター 国際言語教育部門 講師	観光イノベーション計画 地域観光事業	**田辺 加恵** 国際教育センター 国際言語教育部門 講師
	世代を超えた知の共有と育成を目指した地域連動型教育プログラムの構築 **崔　一英**　高輪教養教育センター 教授	ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業	**崔　一英** 高輪教養教育センター 教授
	洋上キャンパス－望星丸洋上セミナー **千賀 康弘**　海洋学部海洋地球科学科 教授	ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業	**千賀 康弘** 海洋学部海洋地球科学科 教授
	札幌市南区の再発見と活性化；世代を越えた活動と大学の知の貢献 **竹中　践**　生物学部生物学科 教授	ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業	**竹中　践** 生物学部生物学科 教授
	スマイルよよぎプロジェクト **遠藤 晃弘**　観光学部観光学科 講師	ライフステージ・プロデュース計画 大学開放事業	**遠藤 晃弘** 観光学部観光学科 講師
	熊本における医工連携事業の推進・拡大と地場産業の活性化 **岩橋 正國**　基盤工学部医療福祉工学科 教授	地域デザイン計画 ブランド創造事業	**岩橋 正國** 基盤工学部医療福祉工学科 教授

安心安全事業

keyword 安心・安全, 防災, 減災
連携地域 平塚市, 伊勢原市, 秦野市, 大磯町, 港区, 静岡市, 熊本市

取組代表者: 内田 理（情報理工学部情報科学科 教授）
共同取組者: 杉山 太宏（工学部土木工学科）、山本 吉道（工学部土木工学科）、梶田 佳孝（工学部土木工学科）、山本 義郎（理学部数学科）、成川 忠之（現代教養センター）
富田 誠（教養学部芸術学科）、田島 祥（現代教養センター）、木村 英樹（工学部電気電子工学科）、長尾 年恭（海洋研究所）、村上 祐治（基盤工学部電気電子情報工学科）
福崎 稔（熊本教養教育センター）、崔 一英（高輪教養教育センター）、宇津 圭祐（情報通信学部通信ネットワーク工学科）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

災害への対応策を自治体や地域住民と連携して確立 ー災害に強いまちづくりを目指してー

地震や台風、ゲリラ豪雨等の大規模な自然災害が避けられない我が国では、発災前、発災時、発災後の時系列を考慮した対応策を平時から入念に準備することが必須である。例えば発災後の被害を最小限に抑えるためには、避難計画や情報収集・伝達手段、救援・救護体制に関する事前検討が極めて重要となる。本取組「To-Collabo 安心安全プロジェクト」の目的は、多種多様な災害への対応策を自治体や地域住民と連携して確立することである。そのため、ワークショップやフォーラムなどの各種イベントを連携自治体や地元住民と協働で実施する。特に、大学近隣地域の防災マップづくりやTwitterを利用した災害時情報発信訓練など、地元住民と連携して実践する活動には学生を積極的・主体的に関与させ、パブリックアチーブメント型教育の一環として推進する。また、地域連携を志向した研究活動を活発化させる。

今年度の主な取組

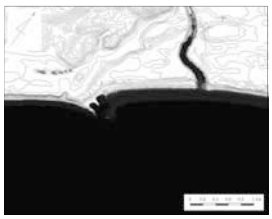
- 「市民による意見交換会」を6月25日に秦野市広畑プラザで開催
- 「第二回防災フォーラム」を10月1日に湘南校舎で開催
- 東海大学研究交流会（9月12, 13日）で「安心安全研究グループセッション」を企画・発表
- 港区主催「ラクっちゃ 秋のスペシャルイベント～防災の秋・芸術の秋～」（9月19日）で講演
- 土石流を予知するための安価な観測システムの開発
- 大磯町を対象とした津波浸水シミュレーション・避難シミュレーションの研究を推進
- 熊本地震発生後の大学生の情報行動に関する調査研究を実施
- 防災教育支援システム（ePAD）を開発し、授業（挑み力（演習B））で実践
- Twitterを利用した災害情報共有システムDITSを開発し、G空間EXPOに出展（予定）
- Twitterを利用した災害時安否確認システムT-@npiの開発
- 「親子で楽しむ防災広場」を12月3日に湘南校舎で開催予定（グローカルフェスタ内）
- 成果発表（論文誌掲載1報、国際会議発表1件、国内学会発表11件（予定含む））

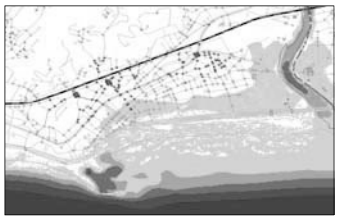
第二回防災フォーラムの様子

第二回防災フォーラムの案内

市民による意見交換会の様子

市民による意見交換会の案内


津波浸水シミュレーション


避難シミュレーション

挑み力（演習B）の様子

東海大学研究交流会での発表の様子

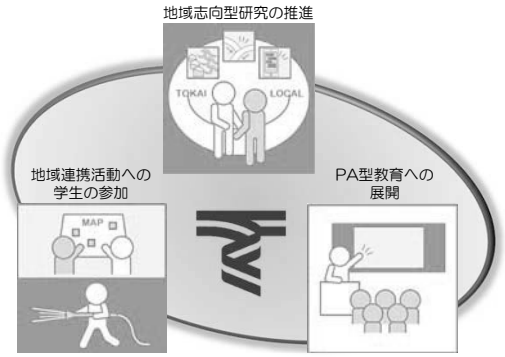
Expected Outcome 想定される成果

地域を志向した教育・研究活動の活性化による 東海大学のブランディング

本取組の連携地域の一つである熊本市は、本年4月に発生した熊本地震により甚大な被害を受けた。また、その他の連携地域のいずれも東海・東南海・南海地震や首都直下型地震、台風やゲリラ豪雨に伴う洪水や土砂崩れなど、自然災害により大きな被害が想定される地域である。本取組は年度初めに策定した実施計画を上回るペースで進捗しているが、さらに自治体や地域住民と連携した取組を推進することにより多種多様な災害への対応策を確立し、災害に強い安全・安心なまちづくりに貢献していきたい。また、それらの活動を通して、地域連携を志向した教育・研究活動の更なる活性化を図っていく。

安心・安全に関する地域連携の取組に学生を関与させることは、東海大学が展開するパブリック・アチーブメント型教育のモデルの一つとなり得る。また、安心・安全に関する研究を地域連携型で推進することは、東海大学が「地域とともに歩む大学」としての認知度を向上させ、ブランド力向上に大きく寄与することが期待できる。

土石流を予測する観測システムの構築



「地域とともに歩む大学」としての ブランド力向上

Twitterを利用した 災害情報共有システム

防災教育支援システム ePAD

Twitterを利用した 災害時安否確認システム

ブランド創造事業

keyword　ブランディング、価値共創、デザイン、商品化

連携地域　札幌市、平塚市、静岡県

取組代表者： 富田 誠（教養学部芸術学科 講師）

共同取組者： 池村 明生（教養学部芸術学科 ）、植田 俊（国際文化学部 ）、岡田 夕佳（海洋学部 海洋フロンティア教育センター ）

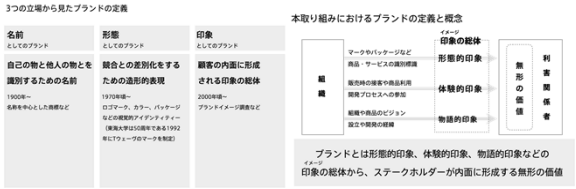
Outline Progress　取組の概要と進捗状況

各キャンパスのある地域ごとの地域資源を、価値ある商品やサービスへ転換し地域のブランドを創造する

本取り組みは、主にブランドに関する勉強会と、各キャンパスごとの商品・サービス化を実践を中心におこなう。

1つ目の勉強会は、ブランドに関する事例研究および外部の方を招いた勉強会である。まずは、様々に解釈されているブランドの定義を整理した上で、本件研究におけるブランドの定義は、形態的印象、体験的印象、物語的印象などの印象の総体から、ステークホルダーが内面に形成する無形の価値とした。

次にブランディングの事例の中で本取り組みの参考になると考えられる二人のクリエイターの方をお招きした勉強会を開催した。 1回目は、「人々を巻き込みながら良質なアイディアを創発するにはどうしたらよいのか」を明らかにするために、広告代理店でワークショップを通したブランド形成をおこなっている方をお招きして、Co-Creation（共創）をテーマとしたワークショップを開催した。（本ワークショップはトコラボ推進室のフリースペースとしても開催し、2回目は職員がファシリテーターとなって実施した）また、「デザイナーと当事者がどういう関係性を築けば良質なブランドデザインができるか」を明らかにするために、被災地の漁業組合でアートディレクターをされている方をお招きして、Design Attitude（デザイン態度）をテーマとした勉強会を開催した。



2つ目は各校舎ごとに試作の制作と展示を中心である。

札幌キャンパスでは過去には多用されていたが現在は使用されなくなった石材である札幌軟石を用いた商品開発を、学生と一緒に実施している。地元石材加工業者および作家と連携し、石の切り出し、加工、展示・販売の現場を見学・取材しながら学生各人イメージを固め、展示会を開催した。

湘南キャンパスでは、平塚市農産物をPRするキャラクターと、平塚市の漁業をPRするキャラクター（いずれも学生考案）の図案をレリーフとする“もなか種”（もなかの皮）の開発し、地域の食材を利用した様々な“もなか”を開発するプロジェクトを実施している。現在はデザイン案から原型制作、金型の製造発注段階まで進んでいる。

清水キャンパスでは、苦境にある静岡県のサクラエビ漁を支援するために、サクラエビのブランド創出を実施している。具体的には、駿河湾産のサクラエビに関する官能評価や、差別化などのブランディング、食品以外の商品の開発を目的に、サクラエビを活用した透明標本の試作などをおこなってきた。

Expected Outcome　想定される成果

今後の予定としては、3キャンパスごとのプロジェクトにおいて本格的な商品開発と商品の公開へと進む予定である。

札幌キャンパスの軟石プロジェクトでは、今後は、札幌市内にて展示会・発表会を行い、広く軟石の文化（＝活用のあゆみ）を発信することを行っていく計画である。

湘南キャンパスのモナカプロジェクトにおいては、「ベジタマ・モナカ」試作商品開発として、ジタマ・モナカの皮を利用した平塚市の地産地消を促進するスイーツの試作をおこなう。また、展示会を通じたプロモーション活動においては、平塚市民プラザにて展示会を開催予定である。

清水キャンパスのサクラエビプロジェクトにおいては、サイエンスイベントにおいて、サクラエビおよび類似する干しエビの官能評価の結果の発表やサクラエビと他のエビを区別するマークの発表を予定しているほか、商品化を前提に廃棄されるサクラエビを活用した透明標本を学生主導で制作する予定である。

これらの取り組みが生み出す価値とは、商品の流通に伴う経済的価値よりも、地域住民や企業、行政機関が商品を作る過程において生まれる物語的な印象や制作の関与して得られる体験的な印象からうまれる無形の価値にあると考えられる。また、学生においては、産官学の垣根を超えた価値を共創するプロセスを体験すること、そしてそこから、みずからの専門性の習得の重要性に気がつくことにあると考えられる。

大学開放事業

keyword 湘南校舎、グローカル、地域連携、市民参加、多世代交流

連携地域 平塚市、 秦野市、伊勢原市、大磯町

取組代表者： 池村 明生（教養学部芸術学科デザイン学課程 教授）

共同取組者： 磯部 二郎（教養学部芸術学科音楽学課程 教授）／岡田 工（現代教養センター 教授）／篠原 聰（課程資格教育センター 准教授）／内田 理（情報理工学部情報科学科 教授）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

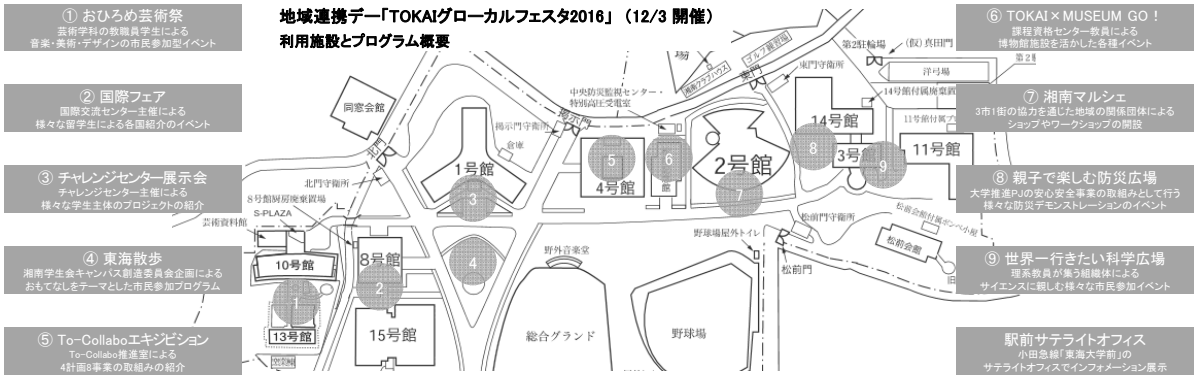
地域連携デー「TOKAIグローカルフェスタ2016」の開催による知を活かした地域住民との多世代交流および「地（知）の拠点化」の基盤づくり

湘南校舎において教職員・学生が一体となり、校舎周辺の様々な世代の地域住民を対象とする地域連携デー「TOKAIグローカルフェスタ2016」を開催する。

取組みの目的は、大学と地域との交流を通じた「地（知）の拠点化」の基盤づくりの実践であり、これまでにTo-Collaboプログラムの「地域志向教育研究経費」や「大学推進プロジェクト」を通じて様々な学部学科・センターの教員が取り組んできた市民参加型の地域連携活動を集約することで、地域住民にとって感じられる大学の親しみにくいイメージを払しょくし、東海大学が掲げる4計画8事業の地域連携テーマをアピールする。また地域に向けた大学独自の取組みとして継続することを目標とする。

本年度は12月3日（土）に開催。プログラムとしては「おひろめ芸術祭」（代表教員：磯部二郎教授）、「世界一行きたい科学の広場」（代表教員：岡田工教授）、「TOKAI×MUSEUM GO！」（代表教員：篠原聰）、「親子で楽しむ防災広場」（代表教員：内田理）といった昨年度までのTo-Collaboプログラム事業の他、学内向けに毎年継続的に実施している「国際フェア」（国際交流センター）と連携をとり、また新規の取組みとして「チャレンジセンター展示会」（チャレンジセンター）、「東海散歩」（湘南学生会キャンパス創造委員会）、「湘南マルシェ」（3市1町協力）の市民参加型プログラムを含め一体化する。

10月末現在、各プログラムの実施に向けては代表教員や主催者を通じて随時調整を行ない、フェスタ全体にかかわる広報・管理・運営面においては、年度初めよりTo-Collabo推進室・高等教育室・事務課・教務課・学生課等、学内様々な事務組織が参加する「TOKAIグローカルフェスタ2016実行委員会」を立ち上げ検討を重ねている。本事業は湘南校舎を会場とした大規模な地域住民対象の地域連携イベントであり、当日の来訪者2000～3000名を見込み、教職員・学生の参加数はのべ200～300名を想定している。



Expected Outcome 想定される成果

地域に対しては「親近感の醸成」や「地域連携テーマのアピール」、学内においては「PA型教育の施行」や「職員参加のSD機会」、そして「地（知）の拠点化の浸透」へ

地域連携デー「TOKAIグローカルフェスタ2016」は、これまでTo-Collaboプログラムや学内の既存組織を通じて実践してきた市民参加型の取組みを集約したイベントであり、それぞれのプログラムは一定の成果が期待できる内容のものである。特に「おひろめ芸術祭」や「世界一行きたい科学の広場」、「親子で楽しむ防災広場」は、昨年度も湘南校舎において実施され、来訪者数も多く、かつ様々な参加プログラムを準備することで地域住民の満足度を高める取組みとなった。また多数の参加プログラムを準備することは教員や学生の参加も見込まれ、地域住民と接する機会が得られることで『学生参加によるPA型教育の施行』といった東海大学がめざす教育改革の基盤形成にも貢献する。

さらに「TOKAIグローカルフェスタ」として、グローバルとローカルな取組みをまとめあげることで、多数の来訪者が見込まれるだけではなく、東海大学がめざす方向性を強く地域および地域住民に対してアピールできる機会と捉えている。その意味で本事業は『大学に対する地域住民の親近感の醸成』や『大学発の地域連携テーマのアピール』につながると考えている。

また今回は教員や学生主導の取組み以外にも、事前の実行委員会の立ち上げを含め様々な事務組織と連携することで『他部署協力による職員参加のSD機会』と捉えることができ、本取組みを実践することでTo-Collaboプログラムの最終目標である『地（知）の拠点化の浸透』につながると考えている。

主な成果
1）大学に対する地域住民の親近感の醸成
2）大学発の地域連携テーマのアピール
3）学生参加によるPA型教育の施行
4）他部署協力による職員参加のSD機会
5）To-Collaboプログラムがめざす地（知）の拠点化の浸透

左写真：昨年度の各イベントの様子

スポーツ健康事業

keyword　健康づくり、健康意識、生活習慣、健康寿命、
連携地域　伊勢原市、 札幌市南区

取組代表者：　沓澤智子（健康科学部　教授）
共同取組者：　松木秀明（健康科学部）、谷口幸一（健康科学部）、東奈美（健康科学部）、池内眞弓（健康科学部）、石井美里（健康科学部）、石井直明（医学部）、柴田健雄（医学部）、芷口隆重（医学部）、浦野哲哉（医学部）、三田　信孝（体育学部）、植田俊（国際文化学部）、中西健一郎（国際文化学部）、山田秀樹（国際文化学部）、塚本未来（国際文化学部）、島崎百恵（国際文化学部）、新出昌明（国際文化学部）、服部正明（国際文化学部）、広川龍太郎（国際文化学部）、森敏（国際文化学部）、相原博之（国際文化学部）

Outline Progress　取組の概要と進捗状況

健康意識の高い市民に対する健康づくりの支援と健康に関心の低い市民に対する健康意識の啓発

伊勢原校舎の取り組み

「東海大学市民健康スポーツ大学」を中心とした市民の健康づくりの支援活動（市民会員の身体活動量と心身の健康度の関連性の分析及び学生と市民との世代間交流活動）

■「東海大学市民健康スポーツ大学」の開催
　年24回の健康講座とスポーツ指導を開催。　その中で6月と3月に体力測定を行う。
　医学的検査、体力測定項目、日々の万歩計データおよびメンタルヘルスに関する質問票調査（GHQ60, POMSなど）、栄養調査項目などのデータベース構築
　2016年度は、メンタルヘルスとの関連を検討

■伊勢原祭における市民健康度チェックの開催
　「東海大学市民健康スポーツ大学」でおこなっている体力測定を、一般市民にも体験してもらう。

■学生と市民との世代間交流活動
　これらの取り組みに学生の参加を継続すること
　高齢市民とのグループワーク（現役の学生と人生の先輩とが共に就活や生き方について語る機会を企画して交流を図る）
　（健康科学部社会福祉学科「地域貢献科目群」の授業の一環として）

「市民に対する健康意識の啓発」プロジェクト　―「健康バス」

●伊勢原市の国民健康保険者の健康診査の未受診者60%～65%の受診に対する意識は、「全く受診する気のない人」と「受診する気はあるものの何となく受診できていない人」と半々の状況。そこで、本プロジェクトでは、この「受診できていない人」を中心に働きかけ、市民に対する健康意識の啓発教育を行う。

●伊勢原市7地域から各々1自治会を選び、自治会単位で測定会を開催することとした。開催地区では、デコレーションした「健康バス」を開催地区で巡回運行して、広告塔としてアピールすることとした。測定項目については、比較評価ができるように、測定メニューの統一を図った。これらにより、「健康バス」の市民への定着化を目指している。

札幌校舎の取り組み

「南の沢」「藻岩」（キャンパス最寄りの地域）の両地区住民を対象とした健康教室

■札幌市南区の「健康面」の地域課題の調査を行い、高齢者の筋力・骨密度の低下による転倒事故・怪我の予防と体力向上が必要

■既に当該地域で行われている健康体操クラブ等の活動とも連携

■認知症関する情報収集の機会の創出、ヨガ・マッサージなど低強度高効率運動の実施、紅葉を見ながらのウォーキング・登山など、地域の方々の要望・希望等もすくい上げ、活動を行った。

東海大学市民健康スポーツ大学

- 会員登録をした伊勢原市民を対象に、単にスポーツの実践のみでなく、健康・福祉に関する講演や実技を通して、健康維持・増進を促進することを目的としている。
- 伊勢原市と連携
- 健康科学部、体育学部生涯スポーツ学科
- 毎年100名の市民会員に対し、年間24回の健康講座およびスポーツ指導を行っている。
- 市民会員の健康度の測定
- 万歩計の貸与→毎日の歩数の計測

体力づくりトレーニング

東海大学健康クラブの講演

骨密度測定

2013年および2014年の新規参加者の1年目と2年目を比較
　女性では、2年目に、体重、BMIが低下し、骨密度、1日平均歩数が増加
　GHQ60によるメンタルヘルス調査で、初年度6名の「うつ傾向」を示した人が、2年目は0となった。

GHQ60によるメンタルヘルス調査結果

		調査	例数	問題なし 0～1点	（%）	注意を要する 2点以上	（%）	有意差
GHQ60-A	（身体的症状）	1年目	53	34	64.2	19	35.8	N.S.
		2年目	55	40	72.7	15	27.3	
GHQ60-B	（不安と不眠）	1年目	53	39	73.6	14	26.4	N.S.
		2年目	55	48	87.3	7	12.7	
GHQ60-C	（社会的活動障害）	1年目	53	44	83.0	9	17.0	N.S.
		2年目	55	48	87.3	7	12.7	
GHQ60-D	（うつ傾向）	1年目	53	47	88.7	6	11.3	*
		2年目	55	55	100.0	0	–	

*：　p<0.05　（1年目と2年目の比較）

学生と市民との世代間交流活動

- 社会福祉学科　選択科目「地域保健福祉活動論」（春セメ）
  - 市民と学生のワークショップ
    - 春セメ　1回
    - 履修学生数　60名、高齢地域住民　10名

- 市民会員

学生への励ましの言葉
- 「アドバイスしてくれる人がいるのは本当に幸せなことですが、最後に決めるのは自分自身です」
- 「やりたいと思ったことに挑戦し、それを続けることが大切。できない理由を探してはいけません」

　学生とコミュニケーションをとることが楽しみ。活動を継続していく魅力の一つになる。

- 学生

感想
- 「家族や友人の大切さ、健康のありがたさ、社会に出ることの責任や厳しさなど、一つひとつの話が身にしみました。辛いときや苦しいときには今日いただいたメッセージを思い出して乗り切りたい」
- 「普段接する機会の少ない"人生の大先輩"の話をじっくり聞くことができてよかった。今でもさまざまなことにチャレンジしている市民会員の皆さんの姿勢に刺激を受けました」

高齢者とのコミュニケーションをとるきっかけとなる。
人生の先輩である高齢者の様々な経験を聴くことにより、自身の人生を考えるきっかけにもなる。

健康バス

「健康バス」測定会・開催地域

「健康バス」参加者からの声

- 身近なところで。回数をもっと。市内全域に。定期的に。学生に感謝。継続して。→更なる展開を
- 保健師や看護師の話が聞けた。詳しく説明が聞けた。時間のない主婦、有り難い。→健康意識の向上
- 忙しくて。面倒と。苦手で。病気をしていないから。節目の。等、これまで健診を受けていなかったがこれからは健診を受けよう。→健康診査受診の動機付け

- 身近なところで健康の測定を受けることができることは非常に有り難い。
  今後は回数をもっと増やしてほしい。（片町第二自治会長）
- 通常の健診にはない測定項目が受けることができることは有り難い。
  来年度は回数を増やすなど市内全域に広めてほしい。
  参加者は皆、喜んでいた。（池端自治会長）
- こうした取り組みは定期的に実行してもらいたい。
- 大学の先生や学生に感謝したい。日程調整等大変だと思うが是非、継続してほしい。
- 待ち時間も少なく保健師や看護師の話を聞けたことは有意義だった。
- 1度に色々な測定ができ、詳しく説明が聞けたので来て良かった。（50代女性）
- 仕事をしていた時は健診を受けていたが、結婚し仕事を辞めてから健診を受けていなかったので、参加した。時間のない主婦には、このような取り組みは大変有り難いと思っている。（30歳女性）
- これまで忙しくて健診を受けていなかったが、10月に会社の健診を受けようと思った。（52歳女性）
- これまで面倒と思い健診を受けていなかったが、自分自身の健康状態が理解できた。（76歳男性）
- 病院が苦手で健診を受けていなかったが、健診やがん検診を受けようと思った。（75歳女性）
- 病気をしていないから健診に行ったことがないが、今後は健診を受けようと思う。（70歳女性）
- これまで健診を受けていなかったが、節目の年齢であり気になっていた。
  今年は健診を受けたいと思う。（65歳女性）

Expected Outcome　想定される成果

健康寿命の延伸につながる！
健診受診率の向上に結び付き、健康維持増進のための生活習慣を身につける

「東海大学市民健康スポーツ大学」

■市民会員は60歳以上がほとんどで、スポーツ習慣と健康的な生活習慣を身に着けることにより、健康寿命を延ばすことにつながる可能性が高い。

＊2013,2014年の女性の参加市民会員では、体重の減少、骨密度の増加、1日歩数の増加が認められた。

＊1年目にうつ傾向を示した参加者が6名いたが、2年目にはゼロだった。

「健康バス」

●「市民に対する健康意識啓発」教育を通して、市民の健康意識向上を図ることにより、直接的には、健康診査の受診率のアップが期待できる。→二次予防

●健康意識の向上は、日々の生活習慣の改善につながる。→一次予防、健康寿命の延伸

●伊勢原市をはじめ、神奈川勢部地域への展開が期待できる

「南の沢」「藻岩」の両地区住民を対象とした健康教室

■地域の施設にでむき、活動を行うことで、地域主体で行われてきた自主的活動のカバーしきれていなかった住民の方々の健康意識の啓発と健康維持増進につながる。

学生教育として、様々な学部の学生が、地域健康教育への関心を高めることができる。
また、学生と地域住民との交流をはかるきっかけになる。

南沢神社会館での「健康教室」の様子

地域観光事業

keyword　インバウンド観光、地域振興、観光マップ、DMC（DMO）

連携地域　神奈川県，平塚市，秦野市，伊勢原市，厚木市，大磯町，二宮町，大井町； 静岡県，静岡市； 熊本市，南阿蘇村； 札幌市，札幌市南区　及び各地域所在の観光協会，旅館組合など。

取組代表者： 松本亮三(観光学部観光学科 教授)

共同取組者： （湘南・代々木校舎）屋代雅充・岩橋伸行・本田量久・服部泰・栗原剛〔観光学部〕・藤田玲子〔国際教育センター〕；（清水校舎）東惠子〔海洋学部〕・小林俊之〔清水教養教育センター〕；（熊本校舎）宮内順・鈴木康夫〔経営学部〕；（札幌校舎）植田俊・杉浦理恵・平木隆之〔国際文化学部〕・平野庸彦〔札幌事務部〕

Outline Progress　取組の概要と進捗状況

『インバウンド観光の推進による地域の活性化』

わが国の訪日外客数は飛躍的に増大してきたが、その受入体制は未だに不十分であり、特に地方への外国人誘客を進め、地域活性化を図ることが要請されている。本事業は、湘南・代々木、清水、熊本、札幌の各校舎で、それぞれの地域との連携を深め、各地の実情に応じた適切なインバウンド観光推進策を、本事業参加校舎全体で案出することを目的としている。各校舎とも学生を参加させて、PA教育を行っている。

（湘南・代々木校舎）『訪日観光客の丹沢湘南地域への誘致方策』

東京に滞在する機会のある訪日外国人に対して、丹沢湘南地域の観光魅力を発信する方法を提案することを目的に、東京滞在中の外国人に丹沢・大山・湘南地域の情報が紹介されている度合い、地元の観光協会からの発信状況、地元のFree-WiFiの整備状況、東京近郊の訪日外国人の消費動向などを調査するとともに、丹沢・大山周辺での外国人の来訪状況について現地調査を行った。現在、大山と類似した観光資源・施設をもつ高尾山を訪れている外国人観光客の来訪動機を現地でアンケートを取って調査中であり、これらの結果をもとに、大山を中心に当該地域への外国人誘致方法を立案し、観光情報を記載した、WEBで見ることのできるマップを作成する予定である。

（清水校舎）『クルーズ客船インバウンド観光―清水港を拠点とした地域振興』

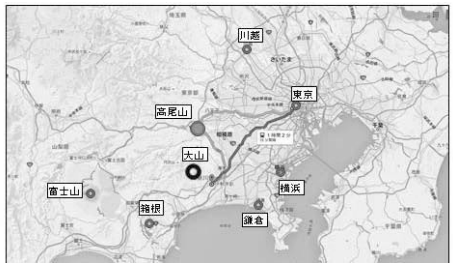
清水港に寄港するクルーズ客船による訪日観光客の参加するバスツアー、まちめぐり等の調査、既存調査を参考に、国交省、静岡県、静岡市と連携して、ニーズに応じたオプショナルツアー等の提案によるインバウンド観光の推進を図ることを目的に、次の事業を進めている。①クルーズ客船による訪日外国人観光客を対象にした静岡特有の地域資源及び日本文化・地域生活体験等の掘り起こしを中心に、インバウンド観光ツアーを提供する。②地域周遊・体験交流型観光マップの制作により地域理解・魅力を発信する。③富士山世界遺産三保松原における観光客と住民のバランスのとれたインバウンド観光客受入れと環境整備の社会実験を通じ、次年度以降の整備に結びつける。

（熊本校舎）『熊本地震後の観光による地域振興―復興DMCの確立』

熊本地震後の観光による地域振興の現状と課題を明らかにし、デスティネーション・マネジメントの必要性を検証することを目的に、観光に関係する15団体・企業（行政、観光協会、旅行会社、宿泊施設など）に対するインタビュー調査を実施。調査内容は、①熊本地震の被災状況、②地震前と比較した現在の状況、③「ふっこう割」の効果、④インバウンドへの影響、⑤今後の対策の5項目で、卒業研究として「熊本地震の観光への影響」テーマとする学生も参加し、観光の現場で詳細な聞き取り調査を行っている。熊本城、阿蘇が被災した影響は大きく、地震直後の4～6月で熊本県の宿泊客は20%減少し、とりわけ外国人旅行者は60%減という厳しい状況にある。11月中に調査結果をまとめる予定。

（札幌校舎）『定山渓温泉のインバウンド観光推進とホスピタリティの向上』

近年、北海道の観光収入における「インバウンド」比率はめざましい上昇をみせている。しかし、札幌市観光（宿泊）を歴史的に支えてきた定山渓温泉地域は、現在著しく衰退している。2016年度が「定山渓温泉開湯150周年」にあたること、東アジアからの来訪客の増加がみられ始めていることなどから、行政・地域をあげて再活性化を図ろうとしている。札幌校舎では、国内・国外の観光客を問わず、旅行者が現地で提供されるサービス、見どころ、観光ルート等が一目見て分かる「ピクトグラム」およびそれを盛り込んだ「温泉街周遊マップ」づくりに取り組んできている。観光協会、旅館組合等と連携し、学生・教職員が協力して事業を行っている。



大山の観光推進（湘南・代々木校舎）
大山・高尾山の位置と大山阿夫利神社への道

清水港を拠点としたクルーズ船インバウンド観光（清水校舎）
清水港周遊・体験ディープツアー実態調査

Expected Outcome　想定される成果

各校舎について、下記のような成果があげられるものと考えている。なお、これらの成果については、**2016年12月18日（日）に、代々木校舎において、4校舎の合同シンポジウムを開催し、発表と討議を行うことを予定している。**

（湘南・代々木校舎）『訪日観光客の丹沢湘南地域への誘致方策』

（1）東京に滞在する機会のある訪日外国人に対して、丹沢湘南地域（特に大山）の観光魅力を発信し、誘致するために必要とされる方法が明確化できる（今年度は英語の通じる欧米外国人を対象とするが、今後はアジア系外国人も対象としたい）。

（2）丹沢湘南地域を訪れる訪日外国人に対して、魅力的かつ実用的な観光プランが何であるのかを明確化できる。

（清水校舎）『クルーズ客船インバウンド観光―清水港を拠点とした地域振興』

（1）調査で判明した課題を解決するために、インバウンド観光客、国内観光客双方が利用できる「富士山絶景 清水港周遊体験による交流型観光ツアー」の造成とマップ制作。

（2）ツアー、マップの実効性をクルーズ客船誘致活動に生かし、インバウンド観光客にマップを配布する

（3）本プロジェクトの実施を通じて、従来各事業が点として整備、実施してきた諸施策を、インバウンド受入れ環境としてのネットワーク体制の下で包括的に行うことで、清水地域の観光促進、地域振興が促進・深化することが期待される。

（熊本校舎）『熊本地震後の観光による地域振興―復興DMCの確立』

熊本の観光は、日帰り観光客数に比較して、宿泊客が少ないという特性がある。熊本地震では、阿蘇への大動脈である国道57号線が分断され、また、南阿蘇への幹線道路がトンネルの崩落で不通になるなどアクセスへの影響が大きい。観光による地域振興では、宿泊客を増やすことが課題となるが、地震後のアクセスのダメージをカバーするためにも、外国人旅行者など宿泊客の回復が急務であり、そのためには、地域全体でハード、ソフトの修復及び強化が必要となる。インタビュー調査から、地震後の観光の課題を明らかにし、デスティネーション・マネジメントによる地域振興の道筋を明らかにすることができる。

（札幌校舎）『定山渓温泉のインバウンド観光推進とホスピタリティの向上』

「旅行者目線」を重視し、ホテル・旅館等の位置よりも景勝地・商店等の情報を優先して配置したり、徒歩・自転車等で移動することでかかる具体的時間・距離を調査し、平面マップだと分かりにくい坂の傾斜・幅等も組み込み、観光客が「歩いてまわってみたくなる」気にさせるマップ制作を目指している（11月末完成予定）。これによって定山渓温泉の観光推進に寄与できると期待している。

熊本地震後の観光による地域振興（熊本校舎）
地震で崩落し閉鎖された俵山トンネル

定山渓温泉のインバウンド観光推進（札幌校舎）
マップ作成のための聞き取りと距離計測調査

文化・芸術事業

keyword 大学コレクション・世代間コミュニケーション・アートマネジメント

連携地域 札幌市南区・平塚市・伊勢原市・秦野市・大磯町・熊本市

取組代表者: 篠原聰（課程資格教育センター 准教授 / 松前記念館付）

共同取組者: 伊藤明彦（国際文化学部デザイン文化学科 教授）、磯部二郎（教養学部芸術学科 教授）、阿部正喜（経営学部観光ビジネス学科 教授）、池村明生（教養学部芸術学科 教授）、長野克也（農学部応用植物科学科 教授）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

「文化・芸術」がひらき・つなぎ・つむぐ大学と地域の連携 札幌・湘南・熊本の取り組み事例

大学には「文化芸術」に関する教育研究の蓄積と、収集された多岐にわたる学術資料や博物館資料がある。それらを広く一般に公開し、大学が知の拠点として地域社会に貢献するプラットフォームづくりを目指した取り組み。人間社会を支える基盤として「文化芸術」を捉え直すことにより、市民起点の新たな文化創造や地域社会における共生、多文化社会の実現の可能性を探究し、実践するプロジェクトである。2016年度は札幌、湘南、熊本の各キャンパスで以下の7計画を実施した。

札幌では伊藤明彦教授を中心に①札幌デザインウィークへのブース出展、②「サハ共和国の自然と音楽～ホムス（口琴）の調べ～」と題するイベントを、湘南では磯部二郎教授を中心とした③「TOKAI芸術シニアアカデミー（音楽・美術・デザインの3講座）と、報告者による④「彫刻を触る☆体験ツアー」、⑤「家族で楽しむアート　真冬の昆虫採集」、⑥公開シンポジウム「彫刻とエロス　目と手で育むユニバーサル・ミュージアムの未来」を、熊本では阿部正喜教授を中心に「長野克也コレクション『世界のたね』」展を開催した。

【札幌キャンパス】
①Sapporo Design Weekへのブース参加
2016年10月19日（日）～10月23日（日）　チカホ（札幌市地下歩行空間内展示）
②サハ共和国の自然と音楽　～ホムス（口琴）の調べ～
2016年11月7日(月）18：30～20：30　クリエイティブスペースMEET.（札幌）

【湘南キャンパス】
③TOKAI芸術シニアアカデミー　3講座各4回
2016年10月8日、15日、22日、29日の各土曜日　13:30～16:30
・音楽講座：「音楽の理解」～音楽の不思議に迫る4つの講座
・美術講座：色彩のポリフォニー～『テンペラ画』を描こう
・デザイン講座：折り紙プログラムで創るランプシェード
④彫刻を触る☆体験ワークショップ
2016年8月11日（木・祝）10:00～15:00　湘南キャンパス内
⑤家族で楽しむアート　真冬の昆虫採集
2016年12月3日（土）11:00～13：00　松前記念館
⑥公開シンポジウム「彫刻とエロス　目と手で育むユニバーサル・ミュージアムの未来」
2016年12月3日（土）15:00～18：20　11号館206教室

【熊本キャンパス】
⑦長野克也コレクション「世界のたね」展
2016年9月9日（金）～9月19日（月）　島田美術館

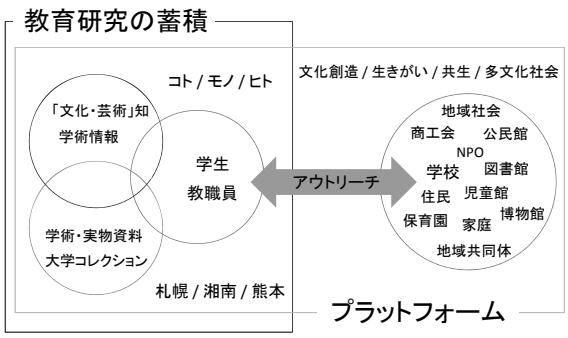
⑦長野克也コレクション「世界のたね」展

Expected Outcome 想定される成果

社会基盤としての文化芸術 生きがい・共生・多文化社会の実現を目指して

本事業の構成要素を、大学の研究活動＝「文化芸術」知、収集された学術・実物資料＝「大学コレクション」、教育活動＝「学びの場」の3つの視点に分類すと、各校舎の取り組みは「文化芸術」知を起点としつつ、例えば④⑤⑦は「大学コレクション」の活用、①②③⑥は新たな「学びの場」として役割を担っており、いずれも地域連携による世代間コミュニケーションを通して、学生の学びのあり方に多様性をもたらすという教育的効果が期待できる。札幌キャンパスの取り組みは、①の「Living Lab SAPPORO　札幌の未来のくらしを提案する」ポスター、パネル展示、②アイヌ音楽研究家を講師に迎え、来日中のサハ共和国の口琴奏者を交えたアイヌとサハとの交流イベント、レクチャーコンサーなど、「デザイン」と「音楽」の領域を中心とした活動で、ポスターの制作など学生の関与を前提としている。湘南キャンパスは、芸術学科の教員による大学の施設を活用した本格的なプログラムとして実施した③TOKAIシニアアカデミー、屋外彫刻のメンテナンスと触る体験学習④「彫刻に触る☆体験ツアー」、地域連携デーと共催の⑤⑥など、「芸術」の領域に関する幅広いレクチャーやイベントに学生が関わっている。熊本キャンパスは「自然」と「芸術」の融合としての展覧会で運営サポートに学生が携わっている。

「文化・芸術」に関する様々な営みを、社会の第一義的な構成要素とみなし、社会を支える基盤の一つとして捉えなおす試みは、少子化や超高齢社会を迎えた今日の日本社会を「生きがい」や「共生・多文化社会」の実現へと導く可能性を秘めている。学生をはじめ、参加者一人ひとりが日本の未来の扉を開いてゆけるような事業展開を目指したい。



⑤家族で楽しむアート　真冬の昆虫採集　ブロンズ昆虫　制作：山岸鋳金工房（伊藤一洋）
⑤三宅純男コレクション

↑　⑤ 家族で楽しむアート　真冬の昆虫採集
松前記念館内に隠れている新種の昆虫（ブロンズ製）を懐中電灯で探し出しオリジナルの作品に仕上げます。昆虫ハンターになろう！

←④　彫刻を触る☆体験ツアー

エネルギー・ハーベスト事業

keyword 再生可能エネルギー, 新エネルギー,創エネ・省エネ, 環境・エネルギー啓発
連携地域 平塚市, 秦野市, 大磯町, 清水市, 熊本市

取組代表者: 福田 紘大 (工学部 航空宇宙学科 航空宇宙学専攻 准教授)
共同取組者: 木村 英樹 (工学部 電気電子工学科)、 高橋 俊 (工学部 動力機械工学科)
長谷川 真也 (工学部 動力機械工学科)、 田中 博通 (海洋学部 海洋建設工学科)
清田 英夫 (基盤工学部 電気電子情報工学科)、 冨田 恒之 (理学部 化学科)

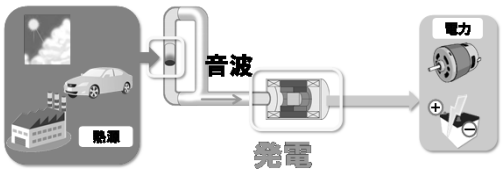
Outline Progress 取組の概要と進捗状況

環境・エネルギー啓発教室の開催、創エネ・省エネ技術の展示を通して、地域住民の方々とエネルギーについて考え、議論する場を創出

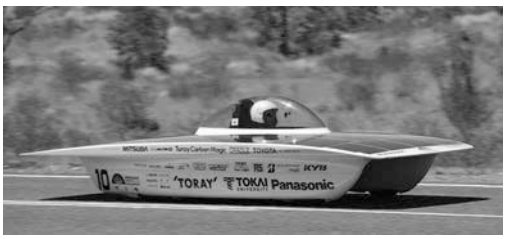
近年、創エネルギー・省エネルギー技術に対する注目や期待が以前にも増して高まっている。しかしながら、再生可能エネルギーや省エネ・創エネに関する理解は、まだまだ浸透しているとは言い難い。一方で、東海大学においては、これまで長年に渡り、様々な再生可能エネルギー技術の研究・開発が進められてきた。

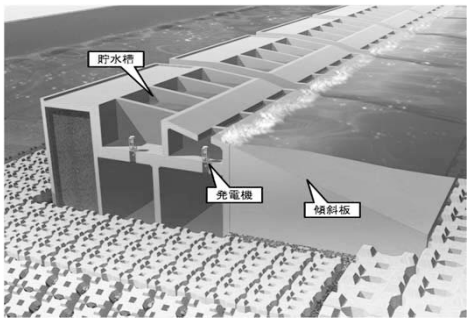
そこで、本事業では、湘南、清水、熊本の各校舎で自治体と連携して、地域の様々な世代の住民の方々を対象とした環境・エネルギー啓発教室の開催、地域の技術フェアなどへの出展などを行い、東海大学で現在研究・開発を進めている最先端のエネルギー技術を紹介するとともに地域の方々とエネルギーについて議論する場を創出し、自分たちが暮らす地域のエネルギー供給についても考える。さらに、本学が進めるパブリックアチーブメント型教育の一環として、学生が地域のエネルギー問題の解決策を地域住民と一緒に考える場を設ける。

今年度は、小学生対象のエネルギー啓発教室や様々なイベントへの出展を通して、一般の市民の方々の再生可能エネルギーや新エネルギーに対する関心が高いことが確認されており、将来に向けて、自分たちの暮らす地域へのエネルギーの供給をどうすべきかについて考える有意義な機会とすることができている。また、イベント開催を通して参加学生から創エネルギー・省エネルギーに関する意見・アイデアも出されるようになってきており、学生が地域のエネルギー問題の解決策を地域住民と一緒に考えるパブリックアチーブメント型教育としての成果も出てきている。さらには、阿蘇キャンパス避難所への災害救援物資輸送を学生とともに支援するなどの活動も行った。



熱音響発電システム


ソーラーカー



越波式波力発電

Expected Outcome 想定される成果

エネルギーの将来を学生と地域の方々が一緒に考える

再生可能エネルギーや新エネルギーについて地域住民の方々に理解を深めてもらうとともに、そのようなエネルギーを日常生活にどのように取り入れることが可能か、エネルギーの将来をどのように考える必要があるかについて考えるきっかけを創出できると考えられる。また、東海大学が進めるエネルギー研究を紹介し、地域の方々と議論を行うことで、技術が地域へと浸透することにも寄与できると考えられる。さらに、学生が地域のエネルギー問題の解決策を地域住民の方々と一緒に考えることでパブリックアチーブメント型教育としての効果も期待できる。

今年度中には、さらに、近隣の子供たちを対象としたエネルギー啓発教室の実施を予定しており、本プロジェクトを通して、地域の様々な世代の方々に本学のエネルギーに関する最新の研究成果を知ってもらうだけでなく、エネルギーの将来について自分たちで考え、議論してもらう機会を作っていきたいと考えている。

環境保全事業

keyword 環境保全型社会，次世代育成，世代間連携

連携地域 秦野市、平塚市、伊勢原市、中郡大磯町、静岡市、札幌市南区、阿蘇郡南阿蘇村

取組代表者：藤野　裕弘(教養学部人間環境学科自然環境課程 教授)

共同取組者：室田　憲一（教養学部人間環境学科自然環境課程 教授）、北野　忠(教養学部人間環境学科自然環境課程 教授)、小栗　和也(教養学部人間環境学科自然環境課程 准教授)、藤吉　正明(教養学部人間環境学科自然環境課程 准教授)、岩本　泰(教養学部人間環境学科自然環境課程 准教授)、松本　晃一(伊勢原研究推進部伊勢原研究支援課　職員)、日比　慶久(教養学部人間環境学科自然環境課程 非常勤講師)、新倉　啓(付属静岡翔洋小学校　教諭)、竹中　万紀子(生物学部生物学科　准教授)、竹中　践(生物学部生物学科　教授)、河合　久仁子(生物学部生物学科 准教授)、千賀　康弘(海洋学部海洋地球学科　教授)、舟尾　隆(教学部清水教学課)、村田　浩平（農学部応用植物科　准教授）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

『環境保全型社会に向けた次世代育成の取組み』をキーワードに各班が特色を生かし取り組み

本取組みでは、大学推進プロジェクトの『環境保全事業』として、『環境保全型社会に向けた次世代育成の取組み』をサブテーマに設定し、各種取組みを行う。

◎湘南校舎藤野班では金目川水系をフィールドに以下の取組みを行う。

①教育機関への支援方法の確立を目指し平塚市立大住中学校地域学習支援

②学校プログラムの発展を目指した近隣小学校（秦野市立大根小学校、伊勢原市立比々多小学校、他現在調整中）への授業（理科及び総合の学習の時間）支援

③特別活動における環境教育として部活動を対象とした出前授業・連携活動の実施

④イベント型学習として、昨年度も実施した『川の勉強会』の開催

⑤学校教育で積極的に環境教育に取り組むことが出来るような河川環境教育補助資料（マップや支援団体情報まとめサイト）の試作

⑥昨年度から試行的に実施している他地域への取組みの発展として、付属静岡翔洋小学校を基点とした清水地域での河川環境教育を行う。

これらに加え、地域住民とともに取り組み、多世代連携を主眼とした

⑦秦野市にあるおじり公園における活用方法の検討

⑧大山地域におけるエコツーリズムへの創出の可能性

についても現在検討を行っている。

◎札幌校舎、竹中班では、テーマを昨年度まで地域志向教育研究経費で実施してきた『コムクドリの生態と渡り解明し保全を考える－地域と大学の協働活動として－』の継続、発展として以下の趣旨で取り組む。

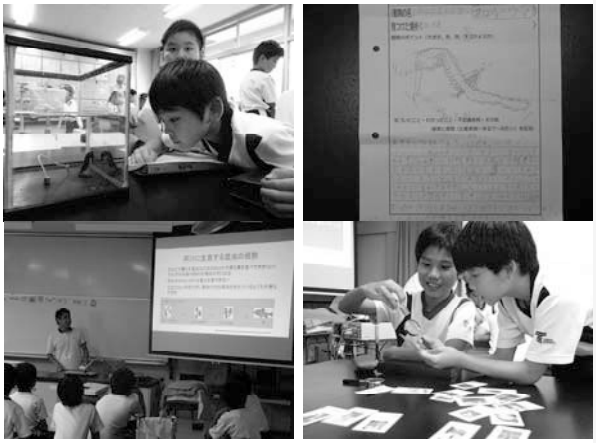
札幌を含む北海道の鳥の70%近くが、東南アジアなどから渡ってくる渡り鳥であり、身近の鳥のほとんどが渡り鳥といっても過言ではないが、その事実はあまり知られていない。身近な生き物が実は世界とつながっていることを理解することは、身近な自然を大切にすることが世界の自然を保全することにつながることの理解につながる。このような視点を子供のうちから持つことが大切である。このような専門的な情報の地域への供給役と大学が機能し、コムクドリをはじめとする野鳥を通じて地域が結びつくような仕組みを作り上げる推進力になると期待している。

◎清水校舎、千賀班では、『水生生物を考える学生サークルの地域連携』をテーマとして以下の通り実施する。

①地元商店街、ショッピングモール等での環境関連イベント、翔洋高校が主催するDream Science 2016に参加し、地元で採取された水生生物の展示を行い、地元環境の素晴らしさを伝える。展示説明は学生サークルが主体的に行う。（5月、8月）

②これまでのモニタリングの成果を冊子にまとめ、地元の小中学校の教材として利用してもらう。

以上、各自の取り組みの成果から、地域や職種年代を横断し、複合的且つ多角的なものの捉え方ができる『環境保全型社会に向けた次世代育成の取組み』をテーマとしたシンポジウムを開催する。



付属静岡翔洋小学校授業

清水三保第二小学校授業

他地域（高崎経済大学）の取り組みの視察

Expected Outcome 想定される成果

核校舎での取り組みを融合し、さらなる環境保全型社会に向けた次世代育成を目指す

◎藤野班

- 全ての取組みに卒業研究生及び大学院生が参画しプロジェクト担当者となるため、各自の企画力や取りまとめの能力の醸成につながり、また、NPOに所属する2年生以下の学生においては卒業研究のテーマを考える上での重要な取り組みとなり、また、3年生以上の学生にとっても卒業研究に直接関係する重要な取り組みである。
- 地域の学校や住民と協力が不可欠となるため、学生が地域での問題や実態を目の当たりにする機会が増えることで、その問題への解決する能力やその対応力への醸成に繋がる。
- 直接的な環境教育による子どもたちへの知識のみではなく、大学生や地域住民と関わる機会を作ることで、大学生・子どもたちへは地域への興味を引き出し、また、地域住民は知識の教授のみならず、相互に地域の魅力に気がつく機会を提供できるものと考える。

◎竹中班

- 普段、見ることができない鳥の繁殖を間近にみせることで、子どもたちの自然への興味を引き出す。また、身近な鳥がはるばる4千キロも旅をしてやってくることを学ぶことで自分たちの生活域も世界とつながっている認識を高めることができる。
- 東海大学生物学部の教育内容への関心を高めることができる。
- デジタル絵本を授業に役立ててもらったり、渡り鳥のことをもっと知ってもらうためのフォーラムを開催することで、自然や生態系への興味や関心を引き出す。

◎千賀班

小中学生を主対象とした親子で参加できる地元開催イベントに積極的に参加し、地元の環境を考える機会を提供する。この取り組みは地域の環境教育を推進するものであり、地域の環境保全に大きく貢献できる。

以上、各自の取組みから『環境保全型社会に向けた次世代育成』が期待できるものである。

伊勢原市比々多小学校主催の里川ウォーキング

川の勉強会

パブリックアチーブメント教育における継続的実践効果の検証による地域担い手育成の取組

keyword 地域連携， パブリックアチーブメント教育， パブリックワーク
連携地域 静岡市， 静岡県， 清水区三保地区

取組代表者： 小林俊行（清水教養教育センター 教授）
共同取組者： 東 惠子(海洋学部環境社会学科 教授)

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

地域に根ざしたパブリックワークへの取組
行政・地域住民・大学・学生の連携

2013年度からパブリックワークに参画する行政，地域住民と学生等の多様な主体の意識変化を調査し，パブリックアチーブメント教育効果を調査・検証してきた。その結果，「満足感」「自己成長」「学習効果」「協働性」という4つの因子が導き出され，特に「学習効果」と「満足感」にそれぞれ84%，74%と高い効果がみられたが，「自己成長」「協働性」はそれぞれ58%，55%の効果しか得られなかった。この結果から，本研究はパブリックアチーブメント教育による意識熟成の変化を調査目的とし，前回同様のアンケート調査とともに継続してパブリックワークに参加してきた学生を対象にした質的調査として，活動ビデオ，発言記録をテキストマイニングによる分析を行いその効果を検証した。

ドリームサイエンス
実行委員・出展者アンケート
地(知)の拠点

＜ 集計結果 ＞

1 アンケート内容

(3) イベントについて印象をお答えください（印象）
1:とてもよかった 2:よかった 3:ふつう 4:あまりよくない
5:よくない
(4) 来年も出展または実施してみたいと思いますか
1:ぜひ参加したい 2:参加したい 3:機会があれば参加したい
4:あまり参加したいと思わない 5:参加したいと思わない
(5) 出展および企画して，満足感は得られましたか
1:とてもあてはまる 2:あてはまる 3:どちらともいえない 4:あてはまらない
5:まったくあてはまらない
(6) 実行委員，補助生徒，出展者，参加者等との新しい出会いがあった
1:とてもあてはまる 2:あてはまる 3:どちらともいえない 4:あてはまらない
5:まったくあてはまらない
(7) 仲間と活動をともにする喜びを感じた
1:とてもあてはまる 2:あてはまる 3:どちらともいえない 4:あてはまらない
5:まったくあてはまらない
(8) 自分にできることで地域や社会，生徒と関わり，人の役に立つことができた
1:とてもあてはまる 2:あてはまる 3:どちらともいえない 4:あてはまらない
5:まったくあてはまらない
(9) 出展，企画，運営等を通して，自分自身が成長できた
1:とてもあてはまる 2:あてはまる 3:どちらともいえない 4:あてはまらない
5:まったくあてはまらない
(10) 出展，企画，運営等，自分が必要とされていることを実感できた
1:とてもあてはまる 2:あてはまる 3:どちらともいえない 4:あてはまらない
5:まったくあてはまらない
(11) 今回の活動を通して，新たにやり甲斐や取り組みたいものを見つけることができた
1:とてもあてはまる 2:あてはまる 3:どちらともいえない 4:あてはまらない
5:まったくあてはまらない
(12) 参加してみての感想をご記入ください

図1 因子別目標達成率

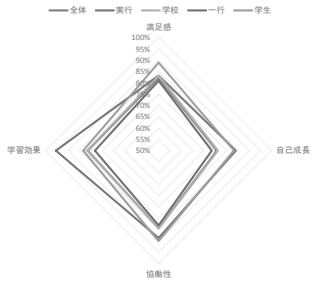
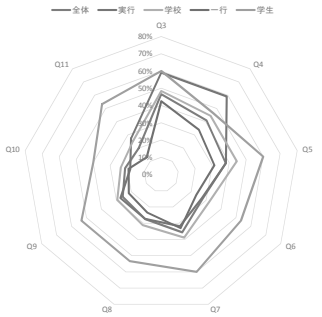


図2 とても当てはまると回答した割合



Expected Outcome 想定される成果

これまでの成果と課題

定量的分析を行った結果，準備段階から参画している行政，学校関係者（教職員），地域住民，実行委員，学生等の意識調査から，本調査においては，いずれの参加者においても「学習効果」と「満足感」に加え，「自己成長」「協働性」にも効果をもたらすことが判明した（図1）。さらに，「とてもあてはまる」と回答した割合をみると，学生は他のどの参加者と比較しても高い割合を示している（図2）。

質的分析ソフトにより，各パブリックワークにおける会話や行動およびインタビューを分析した結果，最初の内は準備に対する不満，不適応や人間関係構築，話し合い活動などに対して否定的な言動が高く見られ，中盤では学生の提案やプレゼン内容に教師や行政の方からの指導を受ける姿が多く見られている。当日の活動ではプレゼン内容や話し方等が格段に向上し，自信を持ち取り組んでいる様子が見られた。

事後アンケートにおける自由記述をテキストマイニング分析すると，“行政”“住民”“今後”“思う”という言葉が一番多く使用され，行政や地域の人の立場を踏まえながら今後のビジョンを考えることを重要視していることが判明した。共起ネットワーク分析から，中心となる言葉は，“考え”となり，住民と行政の間に学生が入り，互いの立場を踏まえながらつながりを作っている関係性が見いだされた。また，感想からは，課題や困難さとともに満足感，成就感を感じていることがわかった。 社会課題を含むパブリックワークを通し，行政，地域住民，大学生が共に取り組むことにより，課題解決のプロセスから学生が自分自身の存在感，必要性，やりがい等を実感し自信をつけていくと考えられる。真に解決しなければならない喫緊の課題に対し，多様な主体による相互理解の協働の取り組みにより，自分の成長を実感できるパブリックアチーブメント教育は，極めて教育的効果が高く，活動を通して地域の担い手として育っていくことが期待される。

景観まちづくりセミナー

清水港未来を創るアートプロジェクト

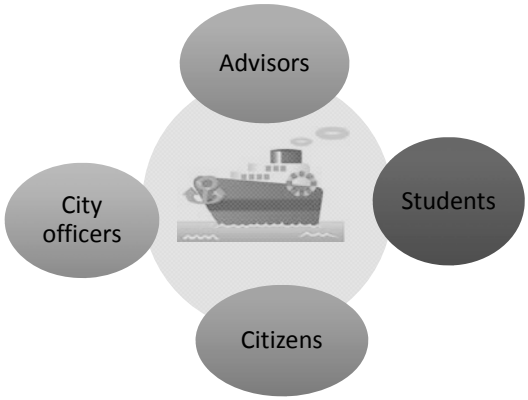
ドリームサイエンス 2016 in Shimizu

清水港・みなと色彩計画25周年記念事業

外国客船入港における国際観光事業への振興支援と英語教育

keyword キーワード, 地域連携、ツーリズム、英語教育
連携地域 静岡市

取組代表者： 加藤和美 （清水教養教育センター 講師）
共同取組者： ゴフ・ウェンディー・マリー （清水教養教育センター 講師）



Outline Progress 取組の概要と進捗状況

現状と問題点

静岡市清水区にある清水港は、2014年に9万トンクラスの外国客船「セレブリティ・ミレニアム」が入港して以降、同規模の豪華客船が年間10隻ほど入港するようになった。東海大学海洋学部の学生は当初からボランティア活動に参加し、2年に渡り英語ボランティア通訳と観光案内を地域の方々と一緒に行ってきた。しかし、ここ数年で急速に国際観光港として発達してきたが、行政、地域住民、学生が同時に情報交換をする機会がなく、観光客のニーズの解釈とその対応方法にずれが見え始めてきた。今後も継続して地域の方々と共に外国客船を受け入れるために、観光客のニーズを研究調査・分析し、調査結果をもとに受け入れ体制の構築を行う必要があった。また、学生、地域ボランティアの人々の英語コミュニケーション力向上のための英語教育を考える必要があった。

解決方法

1. 情報の共有

清水港と同規模の港の国際観光事業とボランティア通訳の実態を調査した。函館港では平成19年から高校生による通訳ボランティアが行われ、第7回観光庁長官賞を受賞している。函館港とその周辺の視察を行い、9月12日にその報告会を行った。報告会には静岡市国際交流協会、清水港客船誘致委員会、市民のみなさん70名が参加した。第一部では、函館港と清水港を比較しながら清水港における観光ボランティア通訳のあり方を講義した。さらに、参加者はグループごと分かれ、実際に清水港で通訳ボランティアを経験した方々の経験談を聞くなど、情報交換を行った。これら情報交換の機会と、アンケート調査結果より、ボランティアに関わる方々の困難や要望など問題点を把握することができた。さらに10月17日、外国客船「セレブリティ・ミレニアム」の乗客を対象にアンケート調査を行った。今後、アンケートをまとめて観光客のニーズを分析調査し、その結果を地域に報告することにより受け入れ側の共通理解をはかる。

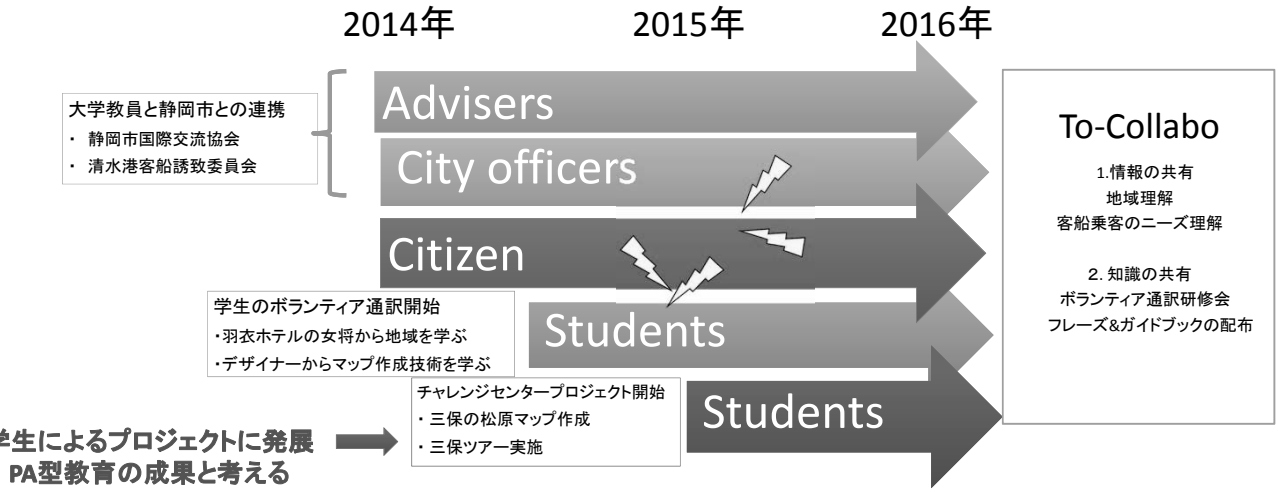
清水港の様子

2. 知識の共有

ボランティア通訳研修会の第二部にて英語授業を行った。英語教育のアクティブラーニングの観点からグループワークを行った。参加者は観光名所や特産品をどのように説明したらよいかを考え、ディスカッションし、思考力、判断力を養った。また、どのように英語で説明をしたらよいか、通訳のポイントを講義し表現力を養うべく練習した。これらの活動は、現場での予想外の質問に臨機応変に対応できる力を養うことを目的とした。最後に、実際に清水港でボランティア通訳を経験した方々を対象に「どのような場面でどのような英語表現を必要としたか」アンケート調査を行った。今後は、これらのアンケート調査から得た情報をもとにボランティア通訳のためのフレーズブック＆ガイドブックを作成し、清水港関係者や学生、地域のみなさんに配布する予定である。

ボランティア通訳研修会の様子

Expected Outcome 想定される成果



高校生の遺伝学的検査の理解を支援する実習形式教育プログラムの開発

keyword 遺伝学的検査、地域アウトリーチ、高校生教育、医学部教育、職業スキル
連携地域 神奈川県伊勢原市

取組代表者： 宮地勇人（東海大学医学部基盤診療学系臨床検査学）
共同取組者： ダムディンスレン・アナラ、永川明香、岩下英夫、浅井さとみ（東海大学医学部基盤診療学系臨床検査学）、梅澤和夫（東海大学医学部外科学系救命救急医学）、松澤秀之（同医学部研究支援センター遺伝子部門）、谷亀博久（伊勢原市教育委員会）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

地域アウトリーチによる高校生の遺伝学的検査を学ぶ機会提供

医学生はインストラクター役

高校生は生物学でDNA、遺伝子を学ぶが、理解は必ずしも十分でない。本研究課題では、地域アウトリーチによる高校生における遺伝学的検査の理解の支援に加え、その取組みを通して医学部学生（医学生）の遺伝学的検査に関する理解を深め患者説明能力を培うことを目的とした。高校生が医学部にて実践的な遺伝子解析実験を体験し、また、医学生が主体となって一連のプログラムを進行することで、双方にメリットのある取組みである（図1）。

東海大学の医学生（7名）は教員の監督のもと、インストラクターの役割を担い、地域在住の中・高校生（男性2名、女性5名）に講義や実習を実施した（図2）。教材は、医学部選択必修「DNA診断実習（2週間コース）」で医学生が準備し、中・高校生のため1日実習コースを開催した。実習コース前に医学生は、基本的な指導方法についての講習会を受けた。

遺伝学的検査の検出対象は肝臓の薬物代謝酵素UDPグルクロン酸転移酵素*UGT1A1*遺伝子の変異である。変異があると酵素の働きが低下し、抗がん剤（イリノテカンなど）治療で副作用の重症度（高い）を予測できる。教材のポイントは、①DNA抽出、②PCR法、③制限酵素の働きと、④ゲル電気泳動法を学ぶ（図3、4）。事前学習資料を踏まえ、1日で全てを体験できる。高度な内容もインストラー役の医学生のマンツーマン指導で、実験の空き時間を利用して質疑応答できる。

図1　教育プログラムの概要

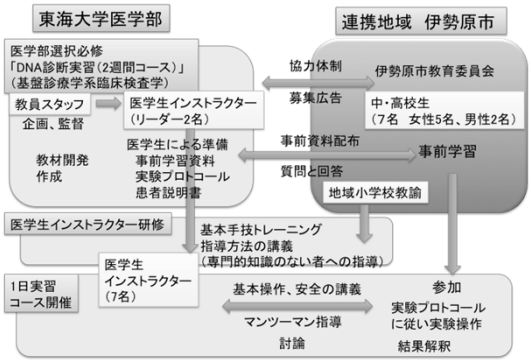


図2. 実習風景

図3. 実習タイムスケジール

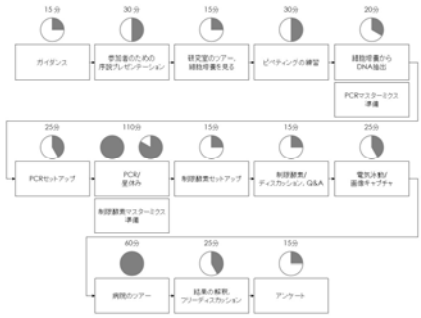


図4. *UGT1A1*遺伝子型と制限酵素認識部位

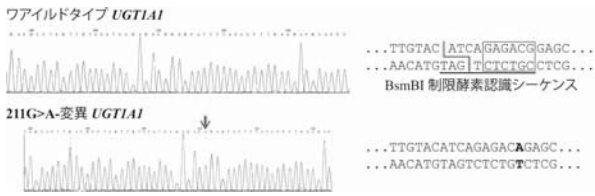
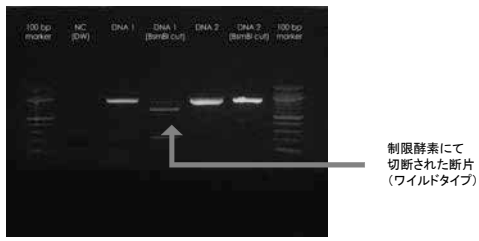


図5. ゲル電気泳動像



Expected Outcome 想定される成果

参加者とインストラクター医学生への学習効果

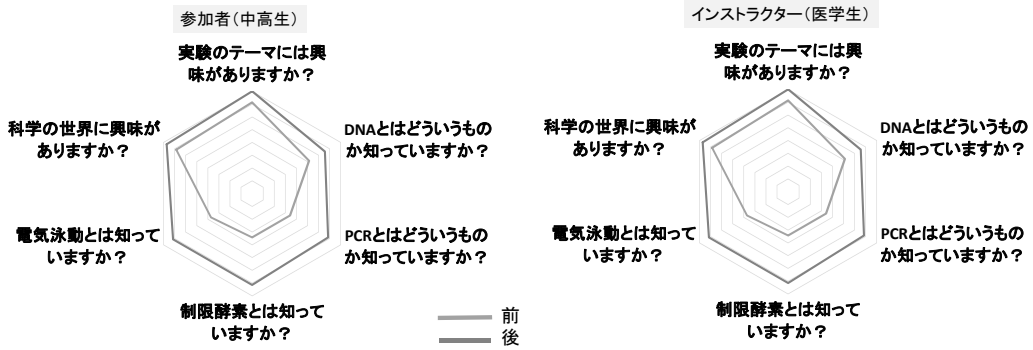
期待効果は、以下のごとくである。①医学生は遺伝子解析の実験を通して、臨床に必要な科学的洞察力のバックボーンになる、②遺伝学や遺伝子解析結果について、中・高校生への説明は、医療の現場に出た際、患者に解りやすく説明するスキルとなる、③教育指導方法の習得は医療チームのリーダーとして指導的役割の素養となる、④中・高校生は、将来の進路を決定する参考機会となる。

参加者は実験プロトコールに従い、PCR産物と制限酵素で反応させたサンプルをゲル電気泳動した後、自分で結果を解釈し、インストラクターと議論をした。参加者は全員、実験の正確な結果を得ることができた（図4、図5）。

評価として、実習の前後で参加者アンケートを行った結果、実習後で各項目のスコアが上がる傾向が見られた。

この企画でインストラクー役の医学生は、遺伝学検査や遺伝子解析の理解向上に加え、科学的洞察力のスキルを高め、専門知識を持たない者に対する説明能力という職業的スキルを身につける機会になった。

図6. 学習効果（アンケート調査結果）



Damdinsuren A, Nagakawa A, Asai S, Miyachi H. A pilot educational program on genetic testing in medical school through local community outreach. Medical Education. 2016 (in press)

「学前夕暮れシアター」（定期映画上映会）の企画・運営

keyword 映画上映会、地域連携、市民参加、作品の発掘、制作支援
連携地域 秦野市ほか

取組代表者： 水島久光（文学部広報メディア学科 教授）
共同取組者： 河井孝仁（文学部広報メディア学科 教授）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

「ここではない、どこかと映像でつながる」秦野市から全国へ、世界へ。

2016年6月、文学部広報メディア学科の水島ゼミのメンバーは、「学前夕暮れシアター」の名のもとに、秦野市「東海大学前」駅前のサテライトオフィスに小さな映画館を誕生させた。

かつて都道府県の条例では、“市”になるための要件として、高等学校・図書館・病院などともに映画館の設置を規定しているところが多かった。しかし時代は変わった。地元の秦野市にも老舗の映画館があったが、10年ほど前に閉館してしまった。

映画産業は近年、集約型のシネコンやレンタル・DVD、テレビ放映、番組化などの二次利用三次利用がビジネスの中心になることで、新しい活路を見出して来たが、その一方で「地域における昔ながらの映画館の役割」が失われつつあった。

ビジネスとしては仕方のないことかも知れないが、全国展開しない作品の上映や、若手作家の発表の場など、街に映画館があることは、地域の映像文化を育む上で、市民にとっても、またクリエーターにとっても大切な意味があったといえないだろうか。「この街にも映画館があって欲しい」そんな想いから、「夕暮れ」とともに上映が始まるこのプロジェクトはスタートした。

これまでの上映作品と今後のスケジュール			
6/24 (金)	プレ上映：「ジェンダー・マリアージュ～全米を揺るがした同性婚裁判～」 監督：ベン・コトナー、ライアン・・ホワイト	10/13 (木)	第6回：「パテベビー　～1930年代の日本の姿～」 講師：水島 久光
7/7 (木)	第1回：「次男と次女の物語」 監督：深津 智男	10/27 (木)	第7回：特別企画「公開授業　特集『TOKYO』」 講師：水島 久光
7/28 (木)	第2回：「螺旋銀河」 監督：草野 なつか	11/17 (木)	第8回：「BANKSY Does New York」 監督：クリス・モーカーベル
8/25 (木)	第3回：「遠い日｜山の終戦」 監督：小森 はるか、瀬尾 夏美	12/8 (木)	第9回：「LIGHT UP NIPPON　ー日本を照らした奇跡の花火ー」 監督：柿本 ケンサク
9/29 (木)	第4回：「ふるさとがえり」 監督：林 弘樹	12/22 (木)	第10回：「happy　しあわせを探すあなたへ」 監督：ロコ・ベリッチ

Expected Outcome 想定される成果

映画を通じ、繋がる地域のコミュニケーション 映画から市民へ、市民から映画へ

プレ上映会を含め、10月末までに7回の上映会を月に1～2回のペースで開催しており、誰でも無料で楽しめる映画館となっている。毎回20人前後の観客と、監督や教員との対談、トークショーも行っており、「いま、ここ」から離れた地域や時代が投影されるスクリーンを通じて、「とおくへ」と想いを馳せるコンセプトが実現している。

東海大学には全国47都道府県から学生が集まっている。若者たちが地域の活動や市民運動に自然と取り組めないのは、彼らが本当の意味で「市民」になっていないからではないか。「夕暮れシアター」の取り組みを通して、地域に出会い、地域とつながることが、「市民」になっていく経験になるのでは――そのような期待もこのプロジェクトには込められている。プロジェクトメンバーは約15名。作品の発掘・選定から配給会社との折衝、会場設営から広報まで、分担して運営している。

また、一般のシネコンのような大型の映画館では、観客が映画を観て、それだけで映画を介したコミュニケーションは終わってしまう。しかし「夕暮れシアター」では、映画から観客へ、観客から映画へ想いをぶつけることができる。暗幕もない小さな施設だからこそ実現できる双方向のコミュニケーション。特に上映終了後には、映画監督等を中心に、上映作品や、背景に隠れる政治的背景、時代背景に対して意見を交換し合う雰囲気がある。こうした場を継続することが、大学がもつ文化創造機能を地域に活かすことにつながるのではないだろうか。

来場者の声

- 暮れてゆく空と、ガラスに反映する画面と二重映しになって、気持ちの良い体験でした。映画はどこで、どのようにどういう人と一緒に観るのか、が大切だということを再認識できました。
- 監督とのトークも内容深い話が聞けて、普段通う映画館とは一味違う個性を感じました。

生命科学実習を通じた地域連携による幼児教育と初等教育の橋渡しの試み

keyword 科学実験教室、オープンラボ、理科教育、DNA、ミュータント
連携地域 伊勢原市

取組代表者: 阿部 幸一郎(医学部 基礎医学系 准教授)
共同取組者: 石井 直明(医学部 基礎医学系 教授)、秦野 伸二(医学部 基礎医学系 教授)、竹腰 進(医学部 基礎医学系 教授)、大友 麻子(医学部 基礎医学系 助教)
【協力者】諏訪間 伸(伊勢原市立子ども科学館 職員)、畠中 良知(伊勢原市立子ども科学館 職員)、江田 茉莉子(伊勢原市立子ども科学館 職員)
竹腰正隆(東海大学 医学部 非常勤講師)、安田 佳代(東海大学生命科学統合支援センター職員)、杉崎 久美子(医学部 臨時職員)、北林みゆき(医学部 臨時職員)

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

小学生の他、幼稚園児の保護者にも呼びかけ親子で生命科学の世界に触れる

医学部は附属病院において、医療行為によって社会に多大な貢献をしているが、その研究内容は、地域社会において広くは理解されていない。また、理科離れは、次世代の研究者・技術者の育成にとって深刻な問題である。そこで、伊勢原市子ども科学館と連携し、小学生と保護者を対象とした生命科学の材料を扱った実習を行って市民との交流を図るとともに、医学部の研究室の一部を開放して、医学研究への理解を深めることを目的とした。さらに、近隣の幼稚園やこども園の園児の保護者に対して、同じ実習と研究室ツアーへの参加を呼びかける。これらにより、生命科学実習を通じて幼児教育と初等教育の橋渡しをするとともに、次世代の生命科学を担う人材の裾野を広げることを目的とする。

取組の進捗状況としては、8月5日，6日の2日間のイベントとして、地域小学校高学年(4～6年生)と近隣幼稚園児(年中～年長児)の保護者を対象に科学実験教室の募集をしたところ、幼稚園保護者から予想以上の応募があり、急遽定員を増員してイベントを行った。小学生参加者11名と幼稚園保護者8名、幼稚園の園児8名、その他に兄弟姉妹や両親そろって参加した家庭もあり、最終的に参加者35名、教職員やスタッフ31名を含めると全体で66名となった。

イベント1日目は、伊勢原市子ども科学館にて、自身の口腔内の細胞からゲノムDNAを抽出する実験や、研究で用いられるマウスの標本などの実験や観察を行った。また、2日目には参加者とその保護者を伊勢原キャンパスへ招待し、研究内容の説明とともに研究室とそこで行われている実験の見学が行われた。これらの実習と研究室見学には、教員に加えて医学部や工学部の学部生と医学研究科の大学院生が参加して補助を行った。

子ども科学館実習

子ども科学館実習

研究室見学ツアー

研究室見学ツアー

研究室見学ツアー

Expected Outcome 想定される成果

幼稚園児，小学生，保護者，教職員，学生ら参加者全体が調和し、教える側も教えられる側も良い経験に

本取組では、地域の小学校生と幼児を育児中の母親に、本学医学部の最新の研究を紹介することを目的とした。この取組の成果は、次世代を担う子どもたちに医学を含めた生命科学への理解とあこがれを持たせ、将来、東海大学に入学して医師や科学者となって活躍する人材を輩出することである。長期的な展望となるが、感受性の強い時期に理系分野に対して達成感や肯定感を育むことができれば、将来の進路選択に大きな影響を与えると期待される。また、育児中の母親に生命科学への関心が得られれば、発達段階の子どもへ大きく影響することが予想される。

今回のイベントでの保護者へのアンケート結果より、「子供はしっかりと理解はできなくても“なんだかすごい”と興奮していた。」、「DNAの抽出を子供と一緒に出来たのが良い経験だった。」、「年長児が顕微鏡に触れられたのがとても良い経験になった。」など子供たちが貴重な経験をしたことに満足した回答が多く見られた。また、子供たちからは、「抗体のB細胞についてもっと詳しく聞きたかった。」、「顕微鏡がたくさんあっておどろいた。」、「東海大学っていろいろな研究分野がある。」、など様々な疑問や感想など強い好奇心が感じられた。そして学生などスタッフからは、「子供の素朴な疑問が意外に深みがあった。」、「自分とは違う着目点に関心させられた。」など、子供たちと接し、自分たちの研究を振り返るきっかけとなった。このように参加者全体より、好評を得ており、次回の開催予定について尋ねられる機会が多かった。

今回の試みより、幼児においても保護者との共同作業であれば実習を行うことが可能であり、大きな効果を上げることがわかった。しかし、今回、実習中に幼稚園児(あるいはその保護者)と小学生とが活発に交流することは見られなかった。今後の課題として、参加者間での交流を活発にするために何らかの工夫が必要であると考えられた。

駿河湾産未利用魚「ハダカイワシ」の加工利活用による地域産業の活性化

keyword 未利用魚, ハダカイワシ, 雑魚, 魚醤油, 缶詰, 標本
連携地域 静岡県, 静岡市, 焼津市, 吉田町, 牧之原市, 御前崎市

取組代表者: 後藤慶一(海洋学部水産学科食品科学専攻 教授)
共同取組者: 齋藤寛(海洋学部水産学科)、山本茂貴(海洋学部水産学科)

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

ハダカイワシや雑魚などの低・未利用魚の可能性を探求 様々な加工食品を開発して地域に積極発信!

駿河湾で水揚げされるが有効利用されていないセンハダカ(ハダカイワシ科)、雑魚(小型のセグロイワシ、マイワシ、サバの混在したもの)およびシュモクザメを原材料とし、学生アイデアによる各種食品の開発を行っている。授業やセミでも取り上げ、地域への情報公開も複数回実施した(朝日新聞(2016年9月7日朝刊)に掲載)。

以下、これまでの実績を示す。詳細割愛するが、HACCPに配慮した衛生管理手法に則り、主な製造は営業許可施設で実施した。

【コンセプト】

学生(大学院生、1年生、2年生、4年生の有志)と共に既知情報を集めてブレインストーミングを行い、今回の取り組みのコンセプトを以下のように決めた。

Win×Win×Win (Win³は以下の各々の希望が叶い、相乗効果が生じることを意図)

⇒研究成果が水産従事者に利益をもたらし、労働意欲向上につながること(Win1:漁師)

⇒試作した食品が企業によって商品化され、地域振興につながること(Win2:企業)

⇒美味しく、安全で健康的な商品が流通し、消費者へ利益をもたらすこと(Win3:消費者)

【開発する加工食品】

低・未利用魚を用いた食品として、以下の食品を開発することとした。

①魚醤油

乳酸菌(*Tetragenococcus halophilus*:ヒスタミン非生産株)や麦麹を用いて魚醤油を試作した(雑魚の魚醤油は仕込中)。センハダカの魚醤油は、㋐自己消化のみ、㋑乳酸菌、㋒麹菌および㋓乳酸菌と麹菌を組み合わせた4種類を試作した(30℃で2ヶ月間発酵)。

歩留まりは50~60%程度。色調は白醤油~薄口しょうゆと類似(写真参照)。塩濃度は水で希釈しすぎたため13~14%となった(目安は15~16%)。麹を添加したものでは一般的な醤油と香味が類似し、自己消化と乳酸菌で発酵させたものは魚介類特有の香味が強調された。市場調査でも70%以上の支持が得られた(ジャパンインターナショナルシーフードショーで調査)(写真参照)。駿河湾水産振興協議会にて特産品候補の一つとして取り上げられ、現在静岡市からの委託を受け、3種類の魚醤油の製造を行っている。この試作品は2017年3月に開催されるFoodex Japan 2017でプロモーションをはかり、製造者と市場規模を模索する予定(協議会が主体となって実施)。

②魚味噌

まるごと魚を使用するにあたって、骨の溶解を検討した。クエン酸(終濃度2%)を原料魚に混ぜて4℃で2日間保管したところ、骨重量は無処理に対し90%程度減少した(写真参照)。骨を溶解処理したセンハダカまたは雑魚と、塩、麦麹と混ぜ合わせて発酵を現在行っている(30℃で3ヵ月間発酵)。プロテアーゼが強いせいか、液状化の傾向がある。

③ラーメン

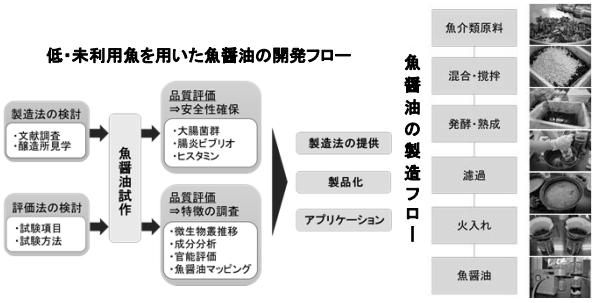
センハダカの煮干しを試作した。この煮干しとセンハダカの魚醤油を使って魚介系のラーメンスープを試作予定。特徴をどの様に出すかが課題(出しすぎると匂いがきつい)。

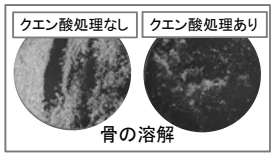
④練り製品(ナゲット、フリッター、はんぺん等)

雑魚、シュモクザメなどの原材料を入手した。練り製品等の試作を行う(写真参照)。

⑤缶詰

120℃で40分間殺菌したセンハダカの水煮缶およびオイル缶を試作し、ハダカイワシ利用研究会で試食した(静岡県内の企業が興味を持った)。また、食品製造学実習で各種スパイスを用いた缶詰の試作を11月に行う予定。





展示会風景

センハダカの
オリーブオイル缶詰

センハダカの
アクリル標本
(イメージ向上のため作成)

Tウェーブ入り
サメはんぺん

未利用魚 商品化に挑戦
売り物ならず「廃棄」もったいない
缶詰・しょうゆ…深海魚で試作

Expected Outcome 想定される成果

駿河湾沿岸自治体とコラボして食品産業活性化に貢献 実学的思考を身につけた社会で活躍できる人材を輩出

センハダカの魚醤油は駿河湾水産振興協議会の開発製品として取り上げられた。製造業者を探索中であるが(暫定的に大学で製造)、発酵を手掛ける業者が少ない、高塩濃度の廃棄物処理の問題などから、まだ見つかってはいない。一方で、外食業者においては調味料として使ってみたいとの意見があり、協議会や大学が参加する展示会等でのプロモーションにより、市場規模が把握されれば、製造業者が見つかるのではと期待される。雑魚などの魚醤油に関してもラインナップ製品として提案したい。

センハダカの煮干しや出汁を利用したラーメンに関しては、地元企業に提案し、インスタントラーメンとしてお土産商品を目指したい。

シンプルな水煮缶やオイル缶でも十分美味しく食べられるが、実習でさらに改良を行い、静岡県内に数多い缶詰企業に投げかけ、商品化に結び付くことを期待したい。

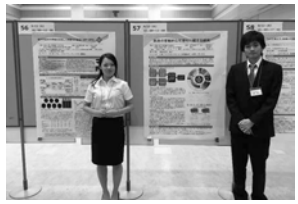
静岡市内の漁業協同組合での聞き取り調査より、水産従事者は人が食べるためと考えて水揚げしているが、数量がまとまらない、目的魚でない、サイズが小さい等の理由で、産廃にしかならないことに憤りを覚えることも少なくないという。資源の減少が叫ばれる中、学生を含め、多くの人たちはこの実態を知る機会はない。本課題を介し、低・未利用魚を使って学生が実際に食品開発を行うことで、問題意識と課題克服力を習熟することができ、これからの社会で活躍できる人材の育成に寄与するものと期待される。

また、低・未利用魚の実態や学生の取り組み、さらには開発した製品を積極的に、かつ繰り返し発信していくことで、世界の合言葉である「MOTTAINAI」の再認識、地元企業活性化のための刺激、食品を介して地域に根差した大学であることの認知度向上等、将来の布石にならんことを願う。

漁協および魚市場の見学で情報取集

食品製造工場の見学で製造の大変さを把握

魚の一次加工処理でスキルアップ


研究交流会等で発表して情報拡散

駿河湾沿岸の産業活性化 / 実学的思考と社会適応力を備えた人材輩出へ

ハダカイワシ
センハダカ
雑魚
シュモクザメ

食品研究開発
- 水産業の実態把握
- 食品開発の実体験
- 地域へ情報発信

東海大学と地域社会との関係を密に...
- 静岡産ブランドとしての定着
- 駿河湾・静岡への愛着度UP

朝焼け富士を駿河湾上から臨む

外国人の視点に立脚した新たな伊勢原市の観光資源創出

keyword 外国人観光客、インバウンド、着地型観光、地域振興

連携地域 神奈川県伊勢原市

取組代表者： 田辺 加恵（国際教育センター 講師）

共同取組者： チョ ヒチョル、マンフレッド カネギター、佐藤 浩一、深井 陽介、眞鍋 正紀、金 ミンス、近藤 喜重郎、シプリアン サンティアゴ、村上 治美（いずれも国際教育センター）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

外国人の興味の対象を調査し、その分析結果を対象地域（伊勢原市）に還元する

近年は、居酒屋や銭湯、デパ地下などが外国人観光客に人気だという。しかしホスト側の日本人にとってはそうした風景はあまりにも日常的すぎて、外国人の目には魅力として映っていることになかなか気づかない。

そこで、外国人は日本のどのようなところをおもしろいと感じているのかを調査する（取組1）。またその結果を伊勢原市にマップ作成という形を通して報告し、今後それらを新たな観光資源として活用するよう、同市に提言を行う（取組2）。

最終的には、大山以外の「普段着姿の伊勢原市」の魅力を外国人に紹介し、同市への外国人誘致を活発化させることが目的である。

■取組1：写真展開催

夏から秋にかけて、訪日経験のある（または訪日中の）外国人に対し、訪日中に興味深いと感じたもの・光景・場所・体験などの写真の譲渡を依頼した。依頼は観光地や国際フェスタなどで直接行った場合もあるし（右3枚の写真参照）、FacebookやTwitterなどのSNSを通じて行った場合もある。現在はこうして集めた写真を整理し、写真展を開催すべく（11月半ば予定）準備を進めている最中である。

■取組2：マップ作り

取組1で収集した写真の分析結果を踏まえ、12月～1月には外国人観光客が興味を持ちそうな場所や空間を伊勢原市内に発掘する。そしてそれらスポットを掲載した「ディープ伊勢原マップ」を多言語で作成し（伊勢原市民にも助言を仰ぐ）、関係各所に配布する。11月14日には、マップ作成の際の参考にする目的で、また着地型観光促進の重要性を啓蒙する目的で、「観光カリスマ」澤功氏に右下図（ポスター）のような内容で講演をしていただく予定である。

現在の進捗状況と今後の予定

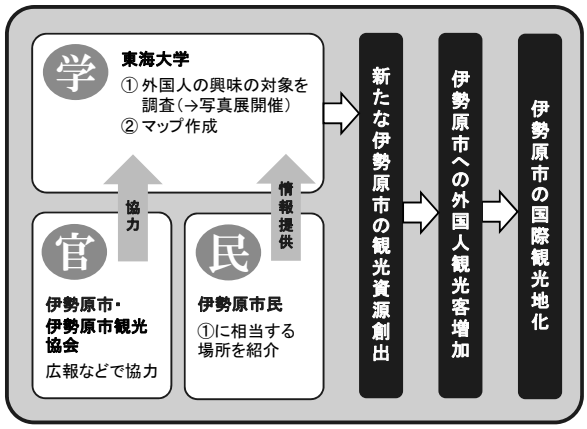
～11月9日	写真展準備	作業場所：	東海大学湘南校舎
11月10日～17日	写真展開催	会場：	小田急伊勢原駅構内
11月14日	講演開催	会場：	東海大学湘南校舎
12月～1月	マップ作成	調査場所：	伊勢原市内

Expected Outcome 想定される成果

伊勢原市に新たな観光スポットを創出し、同市がめざす国際観光地としての地位確立に貢献する

各種翻訳作業、SNSでの発信、写真収集のためのチラシの配布、写真展の準備、新名所の発掘、マップ作成などはすべて学生が主体的に行う。これにより、本学が育成を目標とする「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の4つの力が総合的に養成される。同時にこの地域振興のための活動を行うことにより、今後社会に出た後も十分活用しうるシチズンシップを身につけることができると期待される。語学力向上が見込めるのは言うまでもなく、また自らも隠れた日本の良さを認識することとなり、教育的効果の大きい活動となろう。

対象地域の伊勢原市にとっては、新たな観光スポットの創出によって外国人観光客の誘致・増加が期待でき、我々の活動の成果は同市がめざす国際観光地としての地位確立に向けた重要な提言になると考えられる。



世代を超えた知の共有と育成を目指した地域連動型教育プログラムの構築

keyword 大学開放、PA型教育、多世代交流

連携地域 東京都港区

取組代表者： 崔 一英（高輪教養教育センター教授）

共同取組者： 渡辺晴美（情報通信学部組込みソフトウェア工学科）、小村和彦(情報通信学部経営システム工学科）、程島奈緒（情報通信学部情報メディア学科）、福原雅朗（情報通信学部組込みソフトウェア工学科）、田丸智也（高輪教養教育センター）、田中紀代子（高輪教養教育センター）、福崎稔（熊本教養教育センター）、河村裕文（高輪事務課）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

パブリック・アチーブメント型教育の実践と研究

本取組の目的は、大学が有する知的資源を活用して子ども向けの教育プログラムを作成し、これを全国規模で地域を巻き込んで実施するための方策を検討することである。今年度はこれまでに開発したコンテンツを用いて、学生が児童向けに実施したイベントの効果を確認する。また、遠隔授業の手法を取り入れた教育コンテンツのキャンパス間相互利用方法を確立する。これまでに作成した教育コンテンツの持続的、効果的運営方法の確立、さらに2つの新規コンテンツの開発を行う。

●本年度は、これまでに正課と正課外で6通りのプログラムを実施した。

正課：プロジェクト実践B「音で遊ぼう」、プロジェクト実践D「英語遊び」

正課外：「ロボットと遊ぼう」、「ITを活用した野菜栽培」、「読み聞かせ」、「ものづくり体験教室」

●高輪地区総合支所および高輪子ども中高生プラザと協働した事業では、「たかなわ子どもカレッジ」の安定した運営を行っている。

●社会福祉法人、高輪支所、近隣町会と連携して「たかなわNET」を立ち上げ、地域情報発信のためのFacebook、ホームページの作成を行っている。

●遠隔教育システムに関しては、Adobe Connect会議システムを用いて、通信試験を行い、十分な画質で情報提供が可能であることを確認した。

音で遊ぼう

英語あそび

正課（プロジェクト実践B,D）

野菜の収穫

電子工作

読み聞かせ

ロボットと遊ぼう

正課外イベント

Expected Outcome 想定される成果

学生の社会的実践力向上と高輪地域の多世代協力体制の構築

本取り組みによって高輪地区における東海大学への期待は、単なる交流の場の提供から地（知）の共有と育成の役割へと変化している。

●自治体、住民、各種団体との様々な協働事業によって、大学との信頼関係が構築される。

●子ども、保護者、大学生、シニア層が一体となった地（知）の共有スペースが自発的に創出できると期待している。

●本取組によって、学生の協調性や、多様な世代との円滑なコミュニケーション能力が醸成され、社会的実践力の向上を図ることができる。

●大学近隣地域での住民と学生の連携活動は、PA型教育実践の場になることが示される。

●大学開放活動として、近隣の保育園、学童クラブ、児童館、シニア団体に大学施設を積極的に開放し、身近で開かれた大学になりつつある。

●遠隔教育システムの構築は、高輪校舎と他校舎の学生交流を促進させ、学生相互の地域、文化の理解を進めることができる。

学童クラブ合同運動会

プール遊び

9月の予定

（登録者に限り「たかなわ子どもカレッジ」を利用できます）
※アリーナは開いていれば使用可

火	水	金
		<2日> あそび隊 2：45～6：00
<6日> あそび隊 2：45～6：00	<7日> あそび隊 2：45～6：00	<9日> あそび隊 2：45～6：00
<13日> あそび隊 2：45～6：00	<14日> あそび隊 2：45～6：00	<16日> あそび隊 2：45～6：00
<20日> あそび隊 2：45～6：00	<21日> あそび隊 2：45～6：00	<23日> あそび隊 2：45～6：00
<27日> あそび隊 2：45～6：00	<28日> あそび隊 2：45～6：00	<30日> あそび隊 2：45～6：00

プログラムのお知らせ　To-Collabo

<秋の野菜しゅうかく祭>
おもしろい野菜の育て方について学んでみよう！
実際にしゅうかく体験もできるよ！
場所：東海大学高輪校舎 1号館 1311教室
日程：9月11日（日）
時間：2：00p.m.～3：30p.m.
※詳しくはポスター・チラシを見てね！

たかなわ子ども カレッジ　港区高輪2-3-23　☎080-3443-5166

施設利用

洋上キャンパス「望星丸洋上セミナー」

keyword 望星丸、駿河湾、体験実習
連携地域 静岡市、静岡県

取組代表者： 千賀康弘（海洋学部・学部長）
共同取組者： 川崎一平（海洋文明学科・教授）、占部正承（清水教養教育センター・教授）、砂原俊之（海洋機械工学専攻・教授）成田尚史（海洋地球科学科・教授）、小松大祐（海洋地球科学科・講師）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

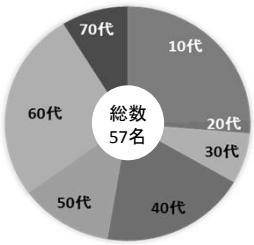
■一般市民を対象とした駿河湾内での「望星丸」体験航海
■市民と学生の交流

（1）9/25 ： 一般市民を対象に「望星丸」にて駿河湾内での海洋実習体験洋上セミナーを開催。一般応募者57名を対象に、教職員11名、学生20名が講師・案内を担当。参加者に海洋学部の教育・研究内容を伝え、駿河湾の魅力に気づき、海の環境保全を考える。

（2）11/3 ： 海洋学部図書館に洋上セミナー参加者（これまで4年間の参加者全員）を招待して、学生とともに駿河湾の魅力を語る。海洋祭へも参加していただき、海に関する学生サークル活動より海の魅力を発信する。

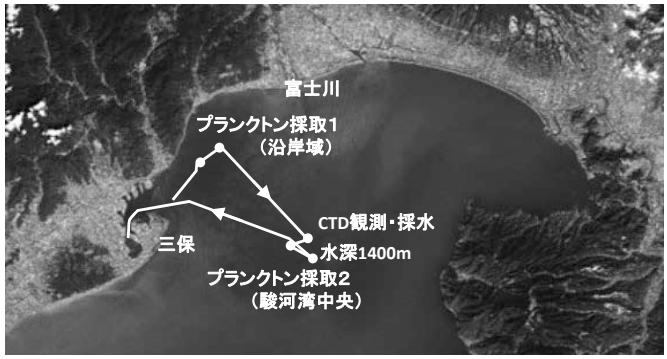
（3）年度内： 図書館利用許可証（年度内有効期限）を発行し、一般市民に海洋学部図書館を開放して、海への関心を高めていただく。

参加者募集ポスター



参加者年齢構成

参加者の満足度



望星丸洋上セミナー航路（2016/9/25）

丸稚ネットによる表層プランクトンの採取を見学

プランクトン採取の説明

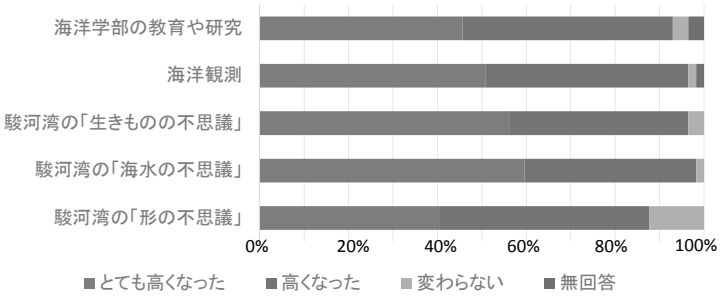
Expected Outcome 想定される成果

■地域の財産「駿河湾」の魅力の発信
■学生が地域の人々とともに学ぶ

（1）セミナー参加者が、地域の財産「駿河湾」の魅力の気づき、海洋学部の学生とともに、海岸清掃、沿岸環境の保全などの活動に積極的に参加して、地元の海を愛する活動を促進する。

（2）地域の人々が、海洋学部の教育・研究を理解し、学生の地域活動やフィールドワーク等に協力していただく事で、学生が地域の人々とともに学ぶ事ができる。

（3）一般の方々が海洋学部図書館を利用して海を学ぶことで、海洋学部が地域の社会教育拠点として貢献でき、学生にとっても、地域の方々とともに学ぶ機会を得られる。



セミナー参加後、興味や関心が高まりましたか？

参加者全員集合（黒ポロシャツは教職員・学生スタッフ）

札幌市南区の再発見と活性化
世代を越えた活動と大学の知の貢献

keyword 札幌キャンパス 市民参加 大学体験
連携地域 札幌市南区

取組代表者： 竹中 践（生物学部生物学科 教授）
共同取組者： 平木 隆之(国際文化学部国際コミュニケーション学科 教授)、伊藤 大介(国際文化学部国際コミュニケーション学科 教授)、田川 正毅(国際文化学部デザイン文化学科 教授)、竹中 万紀子（生物学部生物学科 准教授）、河合 久仁子（生物学部生物学科 准教授）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

札幌校舎が行ってきた南区との地域連携を活かした子供からお年寄りまで、多彩な参加型行事を展開

国際文化学部主催企画

家族で楽しめる、東海大学のふれあい体験。

「Active English 英語で遊ぼう！」
小学校の親子の参加、低学年と高学年に分かれ、英語ネイテイブの教員が中心となって、簡単な英語を使いながら、物語やゲームを楽しんだり、クレヨンや粘土を使った工作をしたりしました。後半は全員が第2体育館に集まって、体を動かして遊び、最後に「表彰式」で締めくくりました。

「パラパラまんが装置を作ろう！」
小学校の親子の参加、デザイン文化学科の工作室でパラパラまんが装置を作り、動く絵を描きました。その他のクラフト作りにも挑戦したり、パラパラまんがを見せ合って交流しました。

生物学部主催・共催企画

「夜のいきもの観察会」（南区もいわ地区センター共催）
幼児、小学生、中学生の親子、地域の方の参加、札幌キャンパスの光風園で夜の生き物観察を行いました。蛾や甲虫を採集するライトトラップ、コウモリ用のトラップを体験して、夜行性昆虫の習性なども学習しました。

「ヒグマとはどんな生き物か」
本学非常勤講師でもあるヒグマの専門家の山本牧氏を講師に、大人も子どもにもわかりやすいヒグマの習性と気をつけることを学びました。後半は頭骨、毛皮、足跡見本などを使って、実際のヒグマの大きさを体験しました。

「南区の自然探訪 バスで巡る川の流域」
小学校の親子の参加、札幌校舎の近くを流れる豊平川の流域をバスで巡って南区の自然の広さと流域の変化を実体験しました。豊平川河岸の利用の変遷や支流の白井川の最深部の鉱山跡、新しい黄金湯さくらの森など、自然だけでなく、人との関わりの風景を写真に撮って記録することを学びました。
また、子どもが使える耐水見開き図鑑を作製し自然観察に役立てました。

Active English 英語で遊ぼう！

パラパラまんが装置を作ろう！

Expected Outcome 想定される成果

札幌キャンパス2学部の特徴を活かした地域貢献と札幌市南区との地域連携を地域と教職員・学生とともに

1）地元地域の学校、団体との交流、連携
すでに札幌キャンパスでは、札幌市、札幌市南区、地元の小学校、地区センター、町内会などとともに多くの行事開催、ボランティア活動、交流活動を展開してきている。札幌キャンパスでのラベンダー祭り、光風園での森のピクニック、除雪福祉プロジェクト、南沢会館でのパソコン教室、小学校への学生ボランティア派遣、札幌マラソンでのボランティアスタッフ派遣、キャンパスの体育館でのスポーツ教室開催など多くの実績を残してきている。

2）南区の社会教育施設との協力の日常化
南区は高齢者人口の割合が高い一方で、ゆったりとした環境に恵まれ、社会教育施設やレクリエーションが充実し、教育環境は優れている。その南区の南沢地区、藻岩地区に位置する東海大学札幌キャンパスが地域貢献、知の貢献を活発に行う意義は大きい。スポーツ、英語、デザイン、芸術、自然、科学、ボランティアなどをキーワードにさまざまな形で連携、協力、貢献を行い、それらを日常化していき、南区の活性化に繋げる。

3）学生の能動的な地域活動参加
地域貢献活動の主体は学生であり、現在でもチャレンジプロジェクト、クラブ活動、学科有志などの形でボランティア活動などに多くの学生が取り組んでいる。教職員が構築した地域連携、地域協力あるいは大学主催活動にも積極的に参加してきている。この流れをなお一層旺盛にしていきたい。

4）教員の専門を活かした地域貢献
大学教員がその専門を活かした社会貢献をすることは当然であるが、単に公開講座の講師を行うといったことに留まらず、地域の方たちと交流し、また学生とともに地域活性化に貢献する活動が望まれる。本企画のテーマはこの点を重視し、大学開放が地域貢献に果たすことができるようなモデルを実施した。

5）地域との連携の継続性
札幌キャンパスと南区を中心とした札幌市との連携活動は、多彩であるだけでなく、それぞれが長く継続している。継続することが地域活性化への貢献の信頼に繋がる。この点もキャンパスとして重視していく。

夜のいきもの観察会
ヒグマとはどんな生き物か
南区の自然探訪 バスで巡る川の流域

スマイルよよぎプロジェクト

keyword 地域連携の運営組織づくり

連携地域 渋谷区

取組代表者： 遠藤 晃弘（観光学部観光学科・講師）

共同取組者： 岩橋 伸行（観光学部観光学科）、安達 精一郎（事務部総務課）、大島 慎一郎（教学部代々木教学課）、佐野 直哉（教学部代々木教学課）、藤井 晶彦（事務部総務課）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

観光学部が代々木校舎をメインキャンパスとして5年 PA教育推進に向けた地域連携の運営組織づくりを目指す

地域を笑顔でつなぐプロジェクトとして、学生と地域の交流を通し、大学開放と地域貢献の取り組みを推進しています。

大学開放は、小学生を対象とした防災宿泊体験「大学に泊まろう！」を実施しました。近隣に住む小学生が学生や教職員と交流し、日常とは違う状況で周りの人と協力し助け合い、防災意識を高めることを目的としたものです。運営に携わったのは、学生、教職員、渋谷区上原地区体育会の方々など35名で、小学生8名が参加しました。夜は協力して“電気を使わない夜”を過ごしました。また、連動企画として「よょまちウォーキング！」を計画しましたが、当日は荒天のためまち歩きを中止し、ゴール後に準備していたおもちつきを参加者全員で楽しみました。大学での宿泊体験やおもちつきは、はじめての企画で、地域や教職員に支えられながら学生がゼロから準備・運営を行いました。

地域貢献は、既存の地域関連行事への運営サポートを主に行いました。7月3日に富ヶ谷1丁目通り商店会で開催された七タイベント「愛夢ランド富ヶ谷フェスティバル」、7月5日に開催された「富ヶ谷保育園夏まつり」、7月24日に上原駅前商店街で開催された「盆踊り大会」などの運営をサポート（模擬店販売・交通誘導・防犯活動・盆踊り等）しました。

代々木八幡駅前商店会「七夕」

学生が担当したのは商店会の出し物（ハワイアンダンス、琉球舞踏唄等）の準備や賞品配布のほか、自ら準備したストラックアウトとバッゴーゲームの出店でした。

代々木上原駅前商店会「盆踊り」

学生は商店街の模擬店での販売や交通誘導・防犯活動を務めたほか、用意したバッゴーゲーム（的入れゲーム）を出店しました。

「防災宿泊体験」「まち歩き」予行演習合宿

10月に上原富ヶ谷地区体育会と共催で計画中の2事業について、予行演習を実施した。代々木学生会とよょさんぽが企画・運営に参画し、備蓄品のチェックをしました。

To-Collaboプログラムで、教育・文化・地域振興・まちづくりといった分野の連携をより密にすることで、これまで以上に充実した協力関係を構築することを目指しています。そのために今年度は、渋谷区富ヶ谷二丁目町会や富ヶ谷一丁目町会、代々木上原駅前商店街と連携した活動を展開しており、その連絡調整を行うための「連絡会議」を定期的（月1回）に、キャンパスで開催しています。

Expected Outcome 想定される成果

地域を笑顔でつなぐ社会貢献プロジェクトを通して 学生が市民性を獲得（キャンパス内も活性化）

本To-Collaboプログラムでは、地域連携の運営組織づくりと、そのためのパイロット事業を計画し、PA教育推進に向けて、これまで以上に充実した協力関係の構築を目指すことを目的としています。

期待できる取組成果として、①キャンパスに対する地域住民の認知度向上、②地域における大学の機能強化（防災面）、③学生が社会貢献を通して市民性を獲得、④職員と学生の交流によるSDの機会、⑤地域連携のための運営組織強化があげられます。

大学と地域が一体となって事業を推進することで、学生のPBL教育実践の場としての可能性を確認していきたいと考えています。近隣住民や商店街と学生が交流する中で、地域の課題を共有し、事業を運営しながら、よそ者・若者としての立場でまちづくりについて考える貴重な機会として生かしていきたい。

学生ミーティングの様子

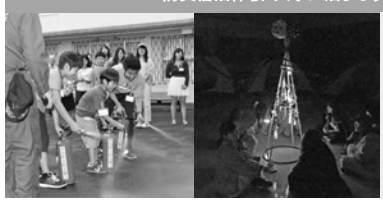
キャンパス内の防災設備を点検

防災・消火訓練

富ヶ谷保育園「夏祭り」

学生が担当したのは、保育園が用意したごきぶりたたき、ワニワニパニック、わなげ、かんつみ4ゲームの運営でした。園児や保護者から大好評でした。

防災宿泊体験「大学に泊まろう！」



消火訓練や消防車見学、防災食の試食等を行いました。夜は、災害時を想定して、講堂にテントを立て、協力して“電気を使わない夜”を過ごしました。

まち歩き「よょまちウォーキング（もちつき）」

荒天のためまち歩きが中止となりましたが、ゴール地点で準備していたおもちつきを実施しました。地域の方がおもちつきのノウハウを学生に教えてくださいました。

上原駅前商店街「ハロウィン」（予定）

富ヶ谷二丁目町会「クリスマス」（予定）

熊本における医工連携事業の推進・拡大と地場産業の活性化

keyword 医工連携，地場産業，産業活性化
連携地域 熊本県，熊本市

取組代表者： 岩橋正國(基盤工学部医療福祉工学科教授)
共同取組者： 中嶋卓雄(経営学部経営学科教授)、津田良一（基盤工学部医療福祉工学科教授）、泉隆(同　教授)、大内可人(同　教授)、小佐井博章(同　教授)、中宮俊幸(同　教授)、村田宮彦(同　教授)、綿引哲夫（同　准教授）、木村達洋（同　講師）、佐藤綾（同　助教）、村上祐治（基盤工学部電気電子情報工学科教授）、岩崎洋一郎（同　教授）佐松崇史（同　教授）、高橋将徳（同　教授）、藤本邦昭（同　教授）、石岩（熊本教養教育センター教授）

Outline Progress 取組の概要と進捗状況

医工連携により地場企業の活性化を図る

熊本県及び熊本市が中心となり、平成26年度末に県内の自治体・教育機関・企業・医療機関等で構成される「くまもと医工連携推進ネットワーク」が成立し、熊本県内・熊本市内において、医工連携の取り組み機運が高まっている。昨年度はこのネットワークを活用し、熊本キャンパスの教職員・学生による「医療現場等における医療機器等の現状・ニーズ調査と分析」、「大学開放による地場企業とのセミナー」、「医療・福祉機器開発補助」等の活動を通して、熊本県・熊本市における地場産業の活性化を目指し、地場企業に対して各種セミナーや医療工学に関する講演会、医工連携推進ネットワーク参加企業に対する医療福祉工学科の実験室開放等を行い医工連携に対する関心が高まった。本年度は特に地場企業への技術的アドバイス、共同開発等を中心活動を行うこととした。
2016年10月末までに下記の取組を行った。

①プラスチック加工を専門とする地場企業に対して技術支援を行っている。
テーマは人工呼吸器連動式発声補助装置の小型化である。

②本学の教員及び学生による医用画像診断に関する研究。テーマは深層学習を用いた皮膚癌（悪性黒色腫）画像の識別であり、2016年10月1日に開催された日本産業技術教育学会第29回九州支部大会でその成果を発表している。

③熊本市内の内科医と本学教員による医療機器及び関連機器の共同開発。
心電計簡易チェッカ、周波数帯域変換による補聴器などの開発を目指している。現在はアナログ電子回路による正常心電図発生装置を手掛けている。

④熊本セミコンフォレスト推進会議参加企業に対する医工連携セミナーの開催。

開催日時：2016年9月30日（金） 14：00～17：00
講演テーマ：工学から見た医療最前線
講師：基盤工学部医療福祉工学科教授　岩橋　正國
医療福祉工学科実習室公開：人工透析装置、人工心肺装置、除細動器、電気メス、人工呼吸器等を公開し、教員・学生が説明・実演を行った。

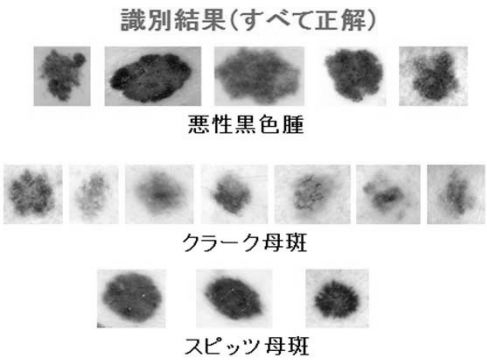


図2　深層学習を用いた悪性黒色腫画像の識別例

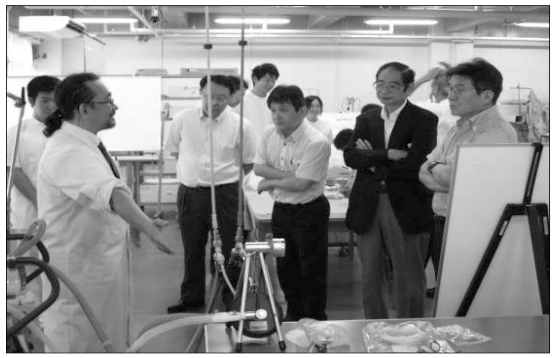


図3　人工呼吸器の実演

Expected Outcome 想定される成果

本課題の取組成果として想定されるもの

①医療従事者・学生・地域住民が、現場レベルで共通の課題に取り組むことで、PBL教育はもちろんのこと、学修効果の向上が望める。

②医療機器分野への参入を企図する企業にとっては、医療現場において直接、医療機器を視察することは難しい状況にあり、本取組を通して、地域の産業を高齢化社会の中で将来性の見込める産業に昇華させることが可能。

③医療現場等で必要とされる製品を開発することにより、患者さんのQOL向上や、学生の医療機器開発・操作に係るノウハウの向上に繋げることができる。

④本取組を、地域住民へ広く報せることで、熊本県・熊本市民の「医工連携分野」に対する理解を深めることができ、安全・安心な社会の実現に向けて貢献する本学の認知度を向上させ、大学と地域が一体となった熊本ブランドを創造することができる。

図1　9月30日開催の講演会

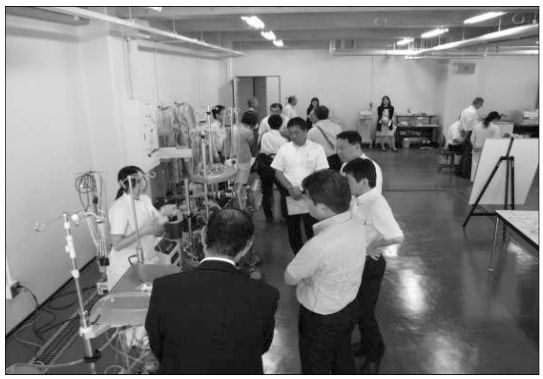


図4　人工心肺装置の実演

MEMO

To-Collabo

東海大学の地域連携トコラボ

東海大学To-Collabo推進室

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4丁目1番1号

0463-50-2406 coc@tsc.u-tokai.ac.jp

公式WEBサイト https://coc.u-tokai.ac.jp

Facebook https://www.facebook.com/tokai.coc

HP

FB